
春隣

桜木結実

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春隣

【Nコード】

N7902A

【作者名】

桜木結実

【あらすじ】

陽光を都とする大栄の国で、勢力を伸ばしている橘氏。ある夜、橘の屋敷で男が殺された。なぜ男は殺されたのか、そして橘でなにが起ころうとしているのか……。さまざまな人間関係が絡まったミステリーです。

第一話 不安の萌芽（1）

ねえ。知っている？

人間の運命を紡ぐ女神が、天上にいるんですって。

あたし達の運命も、その女神が紡いでいるのかしら。

あたし達、という運命に紡がれているのかしら……。

「お姫さん、その怪我はどうなさったんです？」

都で急激に勢力を伸ばしている橘家惣領の妹姫、雪菜のおでこには、ミミズバレが二本浮いていた。

「ちよっとね」

橘家の家臣、広瀬和馬の質問に、雪菜はおでこを手で押さえながら、下を向いて答える。

「惣領殿が上院の御所から戻られたら、追求されますね」

雪菜の侍女、藤枝菊花の言葉に雪菜は顔を上げた。

「菊花も黒川さんも、余計なこと言わないでよ」

「言いませんよ。俺だって、惣領殿はこわいですから」

雪菜の護衛を勤めている黒川泰史が、小声で言う。

「なんだか意味深だなあ。直也が面白くなさそうにしていますよ」

「俺は、別に……。それより、惣領殿は討伐隊の件で御所に行かれていらつしやるんですね。上院から、いいお返事はいただけるでしょうか」

和馬に言われて、慌てて話を変えた若い男は、水越直也である。

雪菜とは、ほとんど他人というくらい遠い親戚にあたる。

「難しいだろなあ。上院も一体どのようなおつもりなのか、全く分からんし」

和馬の言葉に、直也もがっかりしているようだ。

大栄と呼ばれるこの国は陽光を都とし、大山脈を背後にかかえ、貴族を中心として長い間安定した繁栄を誇っていた。だが、二十年ほど前から山脈を越えて蛮族が侵入しはじめ国土を荒らすようになり、九年前にはとうとう大規模な討伐隊が制圧に向かった。その総指揮官が雪菜の父だったのだ。それにより、一度は蛮族の動きも沈静化したのだが、近年再び侵入が活発化し、また討伐隊が組まれることが決定した。雪菜の兄である将一は、その総指揮官を願い出ているのだが、決定権を持つ上院がなかなか任命しようとしなない。橘の内部では、そのことに対する苛立ちがつのり始めていた。

「直也つてば！あたしのケガよりも、討伐隊の方が気になるわけ？」
「だって、雪菜は言う気がないんだろ。聞くだけ無駄じゃないか。大体、問題の大きさが違いすぎるだろ」

「そういうもんじゃないの！直也つてば、全然あたしの気持ちを分かってくれないんだから！」

「そうそう。こういう時は大げさなくらい心配すれば、お姫さんも喜ばれるのになあ」

「そう！そうなの！やっぱり広瀬さんは大人だわ。よくわかってる！」

「おでこを緑に染めて、なに言ってるんですか。それで二人の世界をつくっても、おかしいだけですよ」

泰史の言葉に、雪菜はむっとする。直也と菊花は声を抑えて、笑っていた。

雪菜のおでこは傷に効く薬草を塗っているせいで、薄い草色に染まっているのだ。

「にぎやかですな。渡部ですが、お邪魔してもよろしいでしょうか」
「はい、どうぞ」

廊下から聞こえた、低くてよく通る男の声に、雪菜は返事をする。
「失礼いたします」

障子が開き、脇に小箱を抱えた男が入ってきた。渡部吉住。精悍

な印象の男だ。

「こんにちは、渡部さん。ご無沙汰しています」

「これは、水越殿。お元気そうでなによりです」

傍流とはいえ橘の一族である直也に、吉住はいつも丁寧な口調で接している。

「藤枝さん、これは真砂の土産だ。よかったら、みんなに出してやってくれ」

「いつもありがとうございます。早速、お茶を入れてきますね」

菊花はすぐに立ち上がると、箱を持って部屋を出て行った。

「久しぶりだな、渡部。真砂はどうだった？」

真砂とは、岩塩湖がある辺境の地名である。橘はここで取れる良質の岩塩に、国で最も高貴な上院の紋をつけてブランド化し、都だけでなく国中に流通させて莫大な利益を上げていた。

吉住はその総括長をしていて、都と真砂を往復することが多い。今も、真砂から帰ってきたばかりだ。

「広瀬はずいぶん長い間、真砂に行っていないよな。以前とはだいぶ変わったぞ」

「そうだろうなあ」

「そういえば、真砂で原口という男に会ったぞ。笠原村の出身だと言っていた。昔、広瀬が領主をしていた所だろ？ 知っているか？」

「原口？」

和馬の声が、途端に不機嫌になる。

「原口は岩塩の第一倉庫長をしていてな。お前の話をしたら、笠原村の復興のために一緒に働いた、と話していたぞ」

「原口が復興のために？ よくもそんなことが言えたもんだ」

和馬の強い口調に、雪菜は驚いた。和馬がこんな言い方をするとは、滅多にない。直也もびっくりした顔をしている。

「なんだ、穏やかじゃないな。名波にでも乗って、落ちついてこい。そっぴや、名波の調子はどうだ。大分慣れたか？」

名波とは、和馬が最近手に入れた馬である。丈夫で足も速く、勘

がいい。乗り手の和馬と息がぴったりだった。和馬は毎晩、屋敷の
はずれにある馬小屋まで様子をみにいくほど、名波を可愛いがって
いた。

「そりやもう、絶好……」

「雪菜！雪菜はどこだ！」

部屋の中にいる和馬の声を遮って、庭から大声が聞こえてくる。

「……」

その声を聞いて、雪菜は固まった。

「ばれたみたいですよ」

「あーあ、ついてないなあ」

そう呟いた途端、背が高く、体格のいい男が部屋に現れた。雪菜
の兄であり、橘家惣領の将一である。

第二話 不安の萌芽（2）

将一は大きな足音を立てて中に入り、雪菜の前に座った。雪菜の周りにいた者たちは、慌てて廊下近くに移っていく。するとまた障子が開き、顔立ちの整った男が入ってきた。

「貴船殿、これはいったい何事ですか」

「どうやら、雪菜が御所にまで噂が届くような何かをやらかしたらしい」

「……」

直也が沈黙し、吉住が眉を寄せる。

「そりゃ、まずいですな」

和馬は、どことなく面白がっているようだ。

「お前たちは部屋から出ている」

貴船殿と呼ばれた男の命令に、全員が従う。

直也は心配そうに雪菜を見ていたが、和馬に促され、一緒に部屋から出て行った。

それを待っていたかのように将一が声を低め、雪菜に質問をする。
「おまえ、神原の次女と街で取っ組み合いをしたというのは、本当か」

「さすが、お兄さま。お耳が速い」

「ということは、本当なんだな」

雪菜は、首を縦に振った。

「雪菜……。原因はなんだ。なぜ、よりによって今、神原と争いを起こす」

神原とは古くから御所の警護を担ってきた中流貴族である。橘の台頭によりその地位が脅かされ始め、現在では犬猿の仲となっていた。討伐隊の総指揮官が決まらない今、余計なことで神原に足を引っ張られたくない、というのが将一の本音だ。

「……」

「言いなさい、雪菜」

静かに言う時の将一は、本気で怒っている。

「お兄さま、気落ちしないで聞いてくださる？」

「言ってみなさい」

「神原の由美がね、お兄さまの赤い着物を見たらしくて、さすが成り上がり者だ、趣味が悪いと言ったの」

「そうか。若い女には受けが悪い着物なのかもしれない」

「あんな着物を着ているから、歌い女にすら相手にされないんだつて言われた」

「……」

将一が神原専属の歌い女を口説いているのは、都中で知らない者はいないほどの有名な噂だ。

「ね？ 腹がたつでしょ？」

「うーむ……。まあ、愉快な気分ではないな」

そう言いながらも、将一の顔は引きつっている。

「あたしは腹がたつたわ。それまでもね、あたしのこと山ザルとか、育ちが悪いとか散々言ってきたのよ」

「なに！あの女、そんなことを言うのか」

「でもね、あたし、我慢して相手にしてなかったの」

「うむ」

「だけどね、お兄さまの悪口まで言われて、あたし、我慢できなくなっちゃって。だって、橘の龍とまで言われる、あたしの自慢のお兄さまなのに……」

雪菜はその時のことを思い出し、悔しさで涙が滲んできた。

「そうかそうか、可哀想に。ひどい目にあつたな。よしよし、雪菜は悪くないではないか。なあ？」

そう言つて将一は、下を向いて涙ぐむ雪菜の頭を撫でた。

「将一。説教はどうなった」

「なあに、また上院になにか言われたら、橘は女子までもが勇ましいのです、とでも答えればよい」

「そのように甘やかすから、わがまま放題の山ザルなどと言われるのだ。よい、私が諭そう。雪菜、こちらを向きなさい」

この男の本名は橘英樹という。将一と雪菜の従兄弟にあたり、親族以外からは故郷の地名、つまり「貴船」と呼ばれている。英樹は、一族の中でも将一の右腕として大きな存在感を示しているので、雪菜に大甘な将一に代わって説教ができる、数少ない一人なのだ。

「おいおい、わがまま放題とは言われていないぞ」

「これのどこが、わがまま放題でないというのだ。よいか、雪菜。おまえは現在の橘があるのは、何故だと思っておる」

「お父さまが蛮族制圧の功績をたてられたので、宮中の参内が認められたからです……」

「そうだ。それを足がかりとし、岩塩の利益で軍備を増強した結果、橘は貴族達が面とむかって馬鹿にできないまでに大きくなった。それも叔父上亡き後、将一を中心とした家臣一同が、血の滲むような努力をしたからである。だが、貴族の心の内までもが変わったわけではない。それは雪菜とて身に染みて分かっているはずだ」

「はい……」

「その皆の努力を、惣領の妹姪たるおまえが台無しにするとは、なにことだ。貴族どもは、何を口実に足を引っ張るのかからんだぞ。それすらも理解できぬのか」

「……」

「英樹、もうよいではないか。雪菜とて、もう同じことは繰り返すまい。なあ、雪菜」

「はい。ごめんなさい」

しゅんとしおれてしまった雪菜の頭を、将一はまた二、三度撫でた。

「だが、俺は嬉しかったぞ。雪菜が俺のことで、そんなに怒ってくれるとは」

「お兄さま、ホント？」

「おまえがそうだから、雪菜がいつまでも子供のようなのだ」

「仲のいい兄妹で、結構ではないか。亡き父母も、草場の陰で喜んでおられるに違いない。雪菜。もうこのような短気は起こさんな？」
「はい」

英樹はため息をつく。

甘すぎる。

将一を見る目が、そう言っていた。

「まあ、よい。雪菜も反省しているようだしな。おまえ達、もう入ってきてもよいぞ」

英樹がそう言うと、廊下で待っていた直也達が、部屋に入ってきた。その中には冷めたお茶を持った菊花の姿もあった。将一は菊花からその茶を二杯もらい、一気に飲み干している。一息つく、何かを思い出したらしい。吉住を手招きした。

「渡部、俺達はこれから大倉家に向かうので、岩塩の件は明日にする。あの男は待たせておけ」

「はい。承知いたしました」

二人が行ってしまうと、全員の視線が雪菜に集中する。

「えっと……。心配かけて、すみませんでした」

ペコリと頭を下げて謝る雪菜に、皆から苦笑がもれた。

「菊花、いる？」

青白い冬の月が冴えわたる夜半過ぎに、雪菜はそつと菊花の部屋を訪れた。

「雪菜さま？ どうなさったんです、こんな時間に」

「見て見て。これ、作ったんだ」

雪菜の手には小袋が二つ、握られていた。

「まあ、かわいい。雪菜さまが作られたのですか？」

「うん。明日から直也と広瀬さんが討伐隊の準備で、海神に行くじゃない？ 今日買ってきたアメを、これに入れようと思って。よくできているでしょ？」

海神とは都に運び込まれる荷物を主に扱う、大栄一の港である。

屋敷からは一時間もかからないで行けるが、商人とのつきあいで夜遅くなることも多いので、橘の者が使う簡単な宿舎が用意されていた。

「ええ。直也さま、きつと喜ばれます。広瀬さまの分まであるなんて。広瀬さま、甘いものがお好きですし」

あれ？

菊花、いつもと違う……？

「ねえ。菊花、顔色が悪いよ。具合が悪いの？」

小袋を手に取って眺めている菊花の顔は、青ざめていて血の気がない。

「あ……。はい、頭が痛くて……」

「そうなの？ 大丈夫？ あたし、薬をもらってきてあげる。ちょっと待っててね」

雪菜はそう言うと、菊花の部屋から出ていった。

真冬の廊下は足元から寒さが這い上がってきて、体の中にまで冷気が侵入しようとする。雪菜は冷たい空気を振り払おうと、足早に歩いた。

「あ……。野犬の遠吠えが聞こえる」

雪菜は足を止めた。

それは闇の粒子を揺らしながら、雪菜の耳に届く。

いつもは遙か遠くで聞こえるのに、今夜はやけに声が近い。遠吠えは、ひとつ、またひとつと増えていく。

「やだな。気味が悪い」

耳が痛くなるほどの冷えた闇の中で、それはいつまでもこだまして、雪菜の耳を震わせていた。

第三話 不安の萌芽（3）

「直也、おはよっ!」

「おはよう。朝から元気だな」

雪菜は、母屋の裏にある小さな池のほとりで、直也と待ち合わせをしていた。朝食をとったら、直也はすぐに海神へ出発する。その前にちよつと会いたい、と雪菜が直也に言ったのだ。

「はい。これ、疲れた時に食べてね」

雪菜は、昨夜作った小袋を渡した。

「これは？」

「アメだよ。こっちの、青葉色の小袋が、直也の分ね。これには、直也の好きな味のアメだけが入ってるから。こっちの柳模様の小袋は、広瀬さんに渡してね。なにが好きなのかよく分かんかったから、いろんな味が入ってるよ」

「小袋まで作ってくれたんだ。ありがとう」

直也は、雪菜が作った小袋をずっと見ている。動く指の間から、アメの転がる音がした。

あ。すごく喜んでる。

雪菜は直也の嬉しそうな顔を見て、ほわほわとした幸せな気分になる。

「ねえねえ」

「ん？」

手をつないでいい？

そう聞こうとした時。

「俺の分まで用意してくださったんですか。いや、嬉しいなあ」
和馬の声だった。

「広瀬さん……」

「二人の邪魔して、すみませんなあ。あれ、直也。なんか文句……」
「どうしたんですか、こんなに朝早く!」

「恐いなあ。なんか怒られているみたいだし。散歩だよ、ただの」

「本当ですか?」

「本当、本当」

和馬は笑って言う。だが、どうも信じられない。

「広瀬さんは、毎日こんなに朝早く散歩しているの?」

一緒に歩き出した和馬に、雪菜は訊いた。

「いや、ここまで早くはないんですけど、なんか目が覚めちゃいまして」

「ああ。それはマズイですね」

「なにがマズイって?俺を年寄り扱いしたいのかな、直也」

「大体、わざとらしく邪魔するところが、すでに若くない証拠ですよ」

「ほおお。邪魔されんかったら、一体なにをするつもりだったのかな、直也くんは」

「何もしませんよ」

「じゃあ、そんなに不満そうな顔することないだろ。ねえ、お姫さん」

しかし、雪菜の興味は既に別へ移っていた。

「ね。なんか、あっちが騒がしくない?」

雪菜が指さす方向から、みすばらしい格好の男が二人、歩いてきた。彼等の背後には生垣があるのだが、その奥から数人の声が聞こえてくる。

「そうだな。男の声が複数する。俺がみてるから、雪菜はここで待っている」

だが、直也がそう言った時にはもう、雪菜は歩いてきた男達に声をかけていた。

「ねえねえ、何があったの」

男達は最初、雪菜が誰だか分からなかったようだが、すぐに主人の妹だと気付き、背筋を伸ばして答える。

「はっ！昨日、真砂から到着した原口という男が、屋敷のはずれにある竹林で死んでいるそうです！」

「原口……」

原口って、昨日広瀬さんが言っていた……。

雪菜は後ろを振り返った。直也も和馬を見ている。

そして、和馬は笑みを浮かべていた。嬉しい時に見せる笑顔ではない。

負の感情だけを練り合わせて作ったような、冷たい笑顔……。

「仕方ないでしょうな。天罰というやつですよ。それじゃあ、俺は失礼しようかな。直也、時間に遅れるなよ」

和馬は、そう言くと、背中を向けた。そして、何事もなかったかのように歩いていく。

今のは……。

今のは、本当に広瀬さん……？さっきまで直也をからかっていた広瀬さんなの……？

雪菜は、直也の腕を掴んだ。そして、直也を見上げる。直也の顔もこわばっていた。雪菜も直也も、全身に緊張感がまわりついている。

まさか、広瀬さん……。

まさか……。

「戻ろう、雪菜」

直也の手が、雪菜の頭にぽん、とのせられた。

「うん……」

雪菜は自分の手を重ねて、うなずいた。

第四話 眞実の破片（1）

「原口が殺されたらしいな」

将一は英樹と吉住、それに初老の男 小早川敏郎を見ながら、言った。

敏郎は将一の父の代から仕えている、橘家の重臣である。忠実に尽くしている経験豊富なこの古い家臣を、将一は大いに頼りにしていた。

「はい。早朝、屋敷のはずれで発見されました。貴船殿は、仲間割れとお考えのようですが」

「我々が原口を呼び出したと知った仲間が、口封じのために殺した可能性が一番高からう。小早川は、そうは思わんのか」

「儂も仲間割れのセンが一番高いと思うております。しかし、私的な争いだった可能性もございます。なにしろ問題の多い男のようでしたからな。そうであらう、渡部」

「さようでございます。女癖も悪かったと聞いております。現在までの調べで、原口に恨みを持つ人間が複数名拳がっております」

黙って三人の話を聞いていた将一が、右手を挙げた。その動作で一瞬にして、場が静かになる。

「渡部」

「はっ」

「確か、広瀬は以前に笠原村の領主をしていたな」

「はい」

「広瀬を呼べ。一応、当時の話を聴いてみよう。参考になる話があるかもしれない」

「かしこまりました」

渡部が退出する後ろ姿を見ながら、将一は何度も扇を開けたり閉めたりしていた。

部屋の中は、ほんわりとした暖かさで満ちている。幸せだった頃の断片が菊花の周りを漂って、束の間の安らぎを与えようとしているのだろうか……。

菊花は夢をみていた。父と母に愛され、ただ無邪気でいればよかったあの頃。

そして、一緒にいるだけで全てが満たされた、あの人……。もう夢でしか触れられない。夢でしか、触れてはいけなかったら、せめて今だけ……。今だけでも、あの時のように、あなたと……。

差し出された腕、絡みあった指。そして、熱を含んだ互いの視線……。

全身があなたを求めていた。あなただけが、欲しくて欲しくて……。

目覚めると、枕元に手紙が置いてあった。

薬が効いているみたいなので、起こしませんでした。今日は、ゆっくり休んで。

雪菜の字で、そう書かれていた。

菊花……。

あの人の声が、まだ耳に残っている……。

夢に埋没しそうなこの気持ちを、雪菜の手紙が現実に取り戻した。いけない……。ゆっくりと寝ている場合じゃないのに。

雪菜が持ってきてくれた薬のおかげで、頭痛は治まっている。菊花は起き上がって、布団を畳んだ。そして、素早く身支度を整え、と、暖かい部屋から出て行った。

「なるほど。では原口は、洪水で被害を受けた村の復興費用を横領し、その罪でおまえが村から追放したというのだな」

「はい。ですので、その後の交流関係についてお話できることは、特にございません」

「ふむ……」

将一は、右にいる敏郎を見た。

「広瀬が屋敷にいる日は、ほぼ同じ時刻に名波に乗っているであろう。その時に、不審な人物は見掛けなかったか」

続く敏郎の質問にも、和馬は首を横に振った。

「申し訳ございません。気がつきませんでした」

英樹が将一を見た。敏郎と吉住も見ている。

「広瀬、出発前にすまなかったな。特に決め手になる話はないようだ。原口の件は英樹と渡部が預かることになっているので、もしも何かを思い出したら、伝えてほしい。ご苦労だったな。海神へ気を付けて行ってこい」

「はい。お役に立てず、申し訳ございません」

和馬はお辞儀をして、出て行った。

第五話 真実の破片（2）

和馬がいなくなり、部屋の中はまた、将一、英樹、敏郎、吉住の四人になる。

「渡部。さっきの広瀬の話を、どう思った？」

「特に不審な点は見当たりませんでした」

「話はな。俺が気になったのは、広瀬の話し方だ。やけに淡々としていなかったか？小早川はどうだ」

「そうですね。まるで感情を表に出さないように、自制していたかのように見えました。原口のやったことを考えれば、もう少し軽蔑や嫌悪が出た方が、確かに自然ですな」

「では、広瀬を張るか？」

英樹に言われ、将一は少し考える。

「いや。状況をみてから考えよう。目星をつけている奴らを押さえるほうが、先だな。ただ、釈然としなかったただけだ。おまえ達もご苦労だった。持ち場に帰ってくれ」

そう言つて将一は、扇で肩を数回たたいた。そして頭の中にある、数十もの解決しなければならぬ用件に、優先順位をつけ始めた。

「広瀬さん、遅いね」

「そうだな」

和馬が将一に呼び出されたので、海神への出発が延びている。雪菜は直也と一緒に門の近くで座りながら、和馬を待っていた。

「広瀬さん……。何もしていないよね」

「……」

「直也？」

「今の段階では、なんとも言えない。ただ、もしも原口の死因に広瀬さんが関わっているとしたら、それには余程の理由があるからだと思う」

直也、否定はしないんだ……。

直也のこんなところ、冷静で頼れると思うけど、ちょっと冷たいな、とも思ってしまう。

だって、普段あんなに仲がいいのに、どうして絶対にやっていない、って言い切らないんだろう。もしもあたしが何かに巻き込まれても、今みたいに冷静でいるのかな……。

「待たせたな、直也。悪い悪い」

和馬の声が近くで聞こえた。いつも通りの和馬が、名波を曳いてやってくる。

「あれ、お姫さん。直也のお見送りですか？」

「うん。広瀬さんも気を付けてね」

「どうも。いただいたアメ、ありがたくご馳走になりますよ」

和馬は笑いながら雪菜に手を振った。直也は馬に乗って、じゃあ、ただけ言う。

前から気になっていた直也のそっけなさ、やけに雪菜の不安をざわつかせる。

そういえば、直也ってあたしのこと、どう思っているんだろう。嫌われているとは思わないけど、もしかして迷惑なのかな。だから、そっけないことが多いのかな……。

その考えが、雪菜から無邪気な笑顔を奪う。

あたし、ちゃんと笑えているかな。変な顔、していないかな。そう思いながら、雪菜は直也と和馬に手を振った。

第六話 真実の破片（3）

「貴船殿、お邪魔してもよろしいですか」

「渡部か。かまわん、入れ」

吉住に続いて泰史が部屋に入ると、書類に目を通していた英樹が怪訝そうな顔をする。

「原口の調査の件ですが、黒川を加わらせたいと思ひまして。ご許可いただけますか」

「かまわぬが、なぜだ」

「黒川は商家の出ですので、今回の件ではなんらかの役に立つのではないかと」

「そうなのか？」

「はい。両親が亡くなったあと、渡部さまにこちらのお屋敷を紹介していただきました」

「そうか。雪菜の警護とは、わけが違ふぞ。わかっておるだろうな」

英樹の言葉は、あくまで冷たい。

「承知しております」

「ならば、よい。このまま渡部の下に入れ」

「ありがとうございます」

「総領殿は討伐隊の件でお忙しいが、貴船殿がいらっしゃれば、橘の内部のことは心配いりませんな」

「世辞はいらぬ」

「世辞ではございません。事実でございます」

「……」

吉住の言葉に、英樹は沈黙で返した。

「それでは、失礼いたします」

「これより、よろしくお願い申し上げます」

「うむ」

英樹の返事は、無機質なままだ。

けれど、泰史は気にしなかった。英樹はいつもこうだ。親しみやすさはどこにもないが、その代わり、感情で仕事を乱すこともない。

機械的なやりとりで慣れてしまえば、そうやりづらい相手ではなかった。

吉住と泰史は英樹の部屋を出てから、庭へ出る。

「今日も寒いな」

「これから、もっと寒くなりますね」

二人の吐く息は白く震えていて、そのまま音をたてて凍ってしまいそうだった。

「いよいよだな」

「はい」

「覚悟はいいな」

「もちろんです」

迷いのない泰史の返答を聞き、吉住は深く頷く。

母屋から奥まった場所にある英樹の部屋は、静かで余計な音がない。その部屋に面した庭も、静寂を乱す異分子を排除しているかのように、物音がいりこむ隙間がなかった。

砂利を踏みつける音すらも、異空間へ放りこまれているようだ……。

「渡部さん、どちらへ？」

吉住は、大広間へと続く回廊に向かっていった。

「ちよつとな」

ああ。あの件か。

「渡部さんも抜け目がありませんね。さすがです」

「下手な皮肉だな」

「感心しているんです。俺も見習わないと」

「ただ待っているだけでは、欲しいものが手に入らんさ」
ええ。

その通りです。

泰史はしばらく吉住を目で追っていた。だが建物が邪魔をして、すぐに姿が見えなくなる。

覚悟はいいだろうな。

今更言われるまでもない。苦しみぬいて決めた覚悟が、大きな塊となつて泰史の心の奥を占めている。

父の絶望、母の嘆き。

そして、現実を受け入れることへの苦悶と悲哀。

それらが溶け合い混濁し、今の塊となつたのだ。

「俺は逃げ出しはしない」

泰史はそう呟いて拳に力を入れ、贅を尽くした橘の屋敷をいつまでも見据えていた。

第七話 真実の破片（４）

泰史が警護を離れると雪菜が聞いたのは、英樹の了承を得てからわずか二時間後だった。

雪菜は最初、また泰史がからかっていると思い相手にしていなかったが、菊花にも同じことを告げられ、思わず大声を上げてしまう。「えーっ、それ本当なの？」

「この度、貴船殿よりお役目をいただくこととなりました。短い間ではございましたが、ありがとうございました」

「どうして急にそうなるの？ あたし、なんかした？ あたしの警護、いやになっちゃったの？」

「雪菜さま、よく黒川さんの話を聞いてください。貴船殿の下で働くことになったと言っているではありませんか。おめでとうございます、黒川さん。これで認められれば、また大切なお仕事につながるかもしれませんものね」

いつも通りの穏やかな笑顔で、菊花が泰史にお茶を出す。

「ありがとうございます」

「なんで？あたしの警護の方が楽じゃない。命の危険もないし」

「命の危険は無くても、髪の毛が減る危険がありました」

「いくらなんでも、今から禿げるわけないと思うんだけど」

「わかりませんよ、そんなの。びっくりし通しでしたから、その刺激でやばいかも」

「無表情でそんなことを言われても、あまり悪いとは思えないんだけど」

「まあまあ。だけど、お二人のじゃれあいが見れなくなるかと思うと、本当に残念です」

泰史と雪菜の会話を聞きながら笑っていた菊花が、しみじみと言う。

「あゝあ、黒川さんともお別れかあ。まあ、しょうがないかあ。次

の警護の人って決まっているの？」

「はい」

「ずいぶん早く決まったのね。どんな人？」

「気のいい人みたいですよ」

「それだけ？」

「ろくに話したこともないもんで」

「……」

「不満そうですね」

「分かっているんなら、もうちょっと情報を仕入れてきてよね」

「小早川殿が自ら選ばれたそうです。雪菜さまのお好みを、十分に考慮されたとか」

「うわあ。はずしそう……」

「雪菜さま」

率直な雪菜の感想を、菊花がたしなめる。

「そろそろ失礼いたします。新人も加わるそうですので、早く戻るようにと言われているんです」

「そうですか。寂しいですけど、お仕事頑張ってくださいね。お時間のある時には、ぜひ顔を出してくださいね」

「はい。ありがとうございます」

なんとも珍しい、泰史の笑顔。

黒川さん、笑えるんだあ。

雪菜がそんなことを考えている間に、泰史は次の職場へ行ってしまった。

「ねえ、黒川さん大丈夫かなあ。よりによって、英樹の部下。しかも直接の上司が渡部さんって、大変じゃない？ 渡部さん、厳しそうだしさ」

「あら。けっこう優しい方ですよ」

菊花は雪菜の部屋に飾るために、白くて優雅な大輪の花を手にしていた。

この花は、菊花に一番似合っている。

雪菜がそう思うほど、それは菊花を艶やかに見せていた。

「菊花にはね。なんか、あたしを見る目が厳しい気がする」

「雪菜さまが、何かやらかしたんじゃないやありませんか」

「やってない！……と、思うんだけど」

「渡部さんなら、厳しくても理不尽なことにはなさいませんよ。それに、黒川さんだって自分を試してみたいでしょうし、今回はとてもいい機会だと思います。これがきっかけで、春に組まれる予定の蛮族討伐隊にだって、それなりの役がつくかもしれないじゃないですか」

「そついうもののなの？」

「そついうものですよ」

「ふーん」

「なんだか、緑が足りませんね。庭の枝を少しいただいてもよろしいですか？」

「いいよ。好きなだけ切って」

「ありがとうございます」

ハサミを持って、菊花は庭に出ていった。

自分を試したい、か。直也もそついうことを思っているのかな……。

直也……。

雪菜は今朝の、直也のそつけなさを思い出す。

「あーあ。今日は落ち込むことが多いなあ」

床に寝転り、雪菜は小声で呟いた。

菊花は庭の低木で色合いのいい葉を探したが、今の季節ではあまり気に入るものがない。辺りを見渡しながら、ゆっくりと歩き始め

た。

男の人つてのは仕事で認められたいものなのよ。今は辛くても、あの人のためだからね。

雪菜にあんなことを言つたせいか、昔、母に言われたことを思い出してしまう。

今考えると、母の言葉は間違つていなかった。あの時に思いとどまつたから、今、あの人はここまでこれたのだもの。

菊花はようやく丁度いい葉を見つけ、手にとつた。そして、ハサミで切り取る。切られた枝の断面に、薄茶の傷が小さくついていた。それは、自分に言い聞かせている言い訳で、幾筋もついてしまった心の傷を思わせた……。

「藤枝、雪菜さまはおいでかな」

敏郎の声で、菊花は我にかえつた。

「はい、お部屋にいら……」

菊花は俊郎の後ろにいる人物を見て、言葉が止まる。

「そうか、ではお伺いいたそう」

菊花が驚くことなど、予想がついていたのだろう。俊郎はかえつて菊花の反応を面白がつているようにも見えた。

「菊花」

雪菜の声で、菊花は振り向く。

「ねえねえ、あたしも一緒に葉を選ぶ。お兄さまのお部屋にも何か飾ろうと思うんだけど、まだ注文したお花、残っている……」

雪菜も敏郎の後ろにいる男を見て、驚いている。

「コバじい……？」

コバじいとは、雪菜だけが呼ぶことを許された、敏郎の呼び名だ。まだ雪菜が幼かった頃、小早川と発音できなかったもので、いつの間にかこの呼び名になっていた。

雪菜のびっくりした顔を見れて、俊郎は満足したようだ。

「雪菜さま、ちょうどようございました。この者が、今度の警護の者でございます」

「……橘には珍しいタイプだね」

「青竹晴紀と申します。どうぞ、よろしく」

その男は、三十歳くらいのようだ。短く刈りこんだ髪は金色に染められていて、耳には小さなピアスが沢山ついていた。

街の中心に行けば、こういう男はそこら中にいる。

だが、橘の屋敷では、まず見かけない。

「それでも腕は中々でしてな。護衛としてお役に立つかと」

「……」

雪菜と菊花はニコニコしている晴紀の顔を、じっと見つめた。

第八話 眞実の破片（5）

英樹が庭石に座り、少し離れた右側に吉住が立っている。吉住の反対側 英樹の左隣には、見知らない少年が立っていた。

「遅かったな。貴船殿がお待ちだぞ」

「すみません、ちょっと話しこんでしまったので。貴船殿、失礼いたしました」

「湊、この者が黒川だ。おまえは別の班に入るが、一応この二人にもひきあわせておこう」

「若松湊です。よろしくお願いします」

屈託のない、明るい笑顔だ。この少年には、どこにも翳がない。

「湊は私のばあやの孫だ。まだ都に慣れておらんのでな。まずは簡単なことを手伝わせようと思う」

「黒川泰史です。初めまして」

「黒川とは年も近いし、話もあうだろう。仲良くしてやってくれ」

「はい」

「では、湊。頑張るのだぞ」

「はい！」

英樹が立ち上がると、湊は頭が取れそうな勢いでお辞儀した。吉住と泰史も一礼をとる。英樹は満足そうに頷いていた。

「びつくりしたなあ。あの貴船殿が、ずいぶんと親しげなんだね」

「僕が赤ん坊の頃からご存知なので。子供の頃は、一緒に遊んでくださったんですよ。今回も祖母のわがママをきいてくださって、感謝しています」

「？」

「あ、僕、今度結婚するんです。おまえは世間知らずだから、家庭を持つ前に世間の荒波をかぶってこい、と祖母に言われて、このお屋敷を紹介してもらったんです」

「へえ。婚約者はどんな人？」

「僕より五才年上で、しつかりした美人です。早く会いたいなあ……」

「一緒に都へ連れてくればよかったじゃないか」

「本人に“あたしがいたら、あんた仕事になんないでしょ”って言われました」

ぷっ。

泰史は思わず吹き出した。

「僕、早く一人前になって、彼女を都に呼べるように頑張ります。なんでも言いつけてください！」

「そうだな、がんばってくれ。黒川、彼は牛島の班にいれる。案内がてら、説明してやってくれないか」

「はい、わかりました。じゃあ、行こうか」

湊は吉住にもお礼を言ってから、泰史の後を追ってきた。吉住も仕事に戻ろうとしている。

だが泰史は、吉住が背を向けていながらも、自分達の様子をうかがっていることに気が付いた。

渡部さん……。

隣では、湊が無邪気に村の話始める。ほっと息をつきたくなるような真冬の陽射しが、泰史の周りを穏やかな温もりで満たしていた。震えながらちぢこまって耐えている者をときほぐしてくれる、ひと時の安らぎ。

それは身分も年齢も関係なく、誰もが享受できる暖かい優しさであるはずだ。

だが、泰史の心の中までは、その陽射しもさしこむことはできなかった。

「それで、僕はどんな事をお手伝いするんでしょうか」

「この前、原口という岩塩湖の第一倉庫長が死んだことは、聞いているだろ？」

「はい」

「原口は岩塩の横流しをしていた。その仲間をつきとめることが俺達の目的だ。牛島さんの班は、仲間の候補にあがっている七戸雅也という男を探っている。きみには、その手伝いをしてもらう」

「え？　じゃあ、犯人は捜さないんですか？」

「原口は岩塩の横流しをして、橋に不利益をもたらしたんだ。特に重要人物というわけでもない。かたきを取る、という発想はないだろうな。下端の殺人よりも、今後問題になるかもしれない可能性を潰す方が、橋にとってよっぽど重要だ。それに、仲間割れで殺されたとしたら、調べている間に犯人が浮上してくるかもしれない。上の人達はそう考えている」

「そうなんですか……。でも、ずいぶん早く仲間がわかったんですね」

「渡部さんは岩塩の総括長を何年かやっていらつしやるので、以前から原口のことは調べていたらしい。だけど、決定的な証拠が掌がらないまま、原口が殺されてしまったんだ。だから、怪しい奴の目星は、それなりについているみたいだよ」

「すごいですね」

「そうだね」

「渡部さんだけじゃなくて、黒川さんもですよ」

「俺？」

「僕とそう変わらない年なのに、黒川さんも大人っぽいなあ。僕はのどかな村でのんびりと育ったから、祖母はそういう所を心配したんですね。すごく刺激になります」

「若松くんの家は、村では裕福なほうなんだろう？　幸福に育った人間のおいがするよ。うちの姫さまと同じ種類の人間だ。そういう人は、一生そのままでいることを考えていればいいと思うよ」

「そういえば橋の姫さまって、どんな方ですか？　やっぱり、おしとやかでか弱い、深窓のお姫さまですか」

「いや……。それは、どうだろう」

「教えてくださいよお。僕じゃ、お会いできる機会もないですよ」

「そのうちに見かけるよ。とにかく、じっとしていない人だから」

「おお、黒川。彼が若松か」

庭に並んだ家臣の隊舎から、大柄な男が出てきた。

「彼が牛島さんだ。お待たせいたしました」

「若松と申します。よろしく、ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます」

「うむ。貴船殿のばあさんの孫といっても、特別扱いはせんぞ」

「はい！　よろしく願います！」

「じゃあ、俺はこれで失礼します」

「ありがとうございました、黒川さん」

元氣よく挨拶をする湊を見て、泰史は軽く手を上げた。湊はそれを見ると、嬉しそうに両腕を大きく振った。

第九話 眞実の破片（6）

直也と和馬は早目に宿舎を出発して、街の様子を見てから製鉄所に向かうことにした。

ゆつくりとした速度で歩き、街の空気を深く吸う。真砂の近くにある高浜港とは、雰囲気が大分違っていた。都に運びこまれる荷物が主流なだけあって、裕福そうな商人の姿をあちこちで見かける。

一日の始まりを告げる、朝の光。
だが、都を支えるこの港に漂うのは、浄化された清々しさではない。

一晩中放たれ続けた熱気の名残が夜明けの寒さで凍結し、朝の光を浴びて除々に溶け出し始める……。

そんな活気だった。

直也も和馬も、黙って歩く。

直也は、昨日の和馬の様子について考えていた。

昨日、原口が橘の屋敷にいたこと、そして死んでいたことについて、広瀬さんが全く驚いていなかったのは何故なのか。

その答えが直也の頭にこびりついて、離れない。
たったひとつの答が、いつまでも居座っている。

「広瀬さん、お早いですな。もう視察においでですか」

船が停泊する海岸沿いを歩いていると、小太りの男が声をかけてきた。橘と深いつながりがあり、造船を請負っている佐山勇蔵という商人である。豪商なだけあって、和馬や直也より数倍は仕立てのいい着物を身につけていた。

「やあ、佐山さん。まだ造船所は開いていないだろうと思って、先に製鉄所へ行こうとしているところですよ」

「おや、そうですか。水越殿は最近おみえになりませんでしたな。」

立派な船ができましたぞ。広瀬殿、いかがです。急ぎのご用事でなければ、先にこちらを見にいらっしゃいませんか。」

「そりゃ、かまわんが。どうする、直也。船を見たいか？」

「はい！」

直也の素直な反応に、勇蔵は満足気だ。直也が船の見学をととても楽しみにしていると知っていた和馬は、にやにやしている。

「では、参りましょう」

和馬は勇蔵と並んで歩きながら、馬の話始めた。

勇蔵は海神の中でも最有力の商人だ。岩塩の流通も、勇蔵と他の有力な商人が組んで仕切っている。今回の造船とて、橘の資金だけでは到底足りない。橘と勇蔵等の大商人が資金を出しあつて、色々なものを揃えているのだ。

「水越殿、あれがそうですよ」

勇蔵が指さす方向には、白い帆をはったひとときわ大きな船が、十数隻の小船を従えて停泊していた。

鋼で補強された、力強い船体。小さな窓からは、近年開発された火薬砲がのぞいている。優美さなどどこにもなく、無骨ですらある。けれどその姿こそ、新しい地を切り拓くに相応しい。

「すごい……」

あの船が大海原に乗り込み、疾走し、橘を一層の繁栄に導くのか

……！

「満足いただけたようですね。あの船ならば技術者や金塊も、風に左右されないで運べます」

九年前の討伐隊派遣の時、大山脈の向こうに金脈が眠っていると情報が入り、将一の父は調査の人間を派遣した。そして彼らは小さな金塊と、予想よりも大規模な金脈の存在を報告してきた。だが当時は金脈を探る準備ができていなかったので、宝の山を前に撤退するしかなかった。その後、将一の父は亡くなったが、息子の将一の代になりようやく機会が巡ってきたのだ。これが、討伐隊の総指揮官に将一がこだわる理由のひとつであり、勇蔵等が気前よく協力

する訳でもある。現在の貴族の資金力、そして統率力では、とても未開の地を切り拓くことはかなわない。

あの船が橘の未来を運ぶのだ。橘はこれからますます強大になる……！

その想いは、少年期を脱したばかりの直也を奮い立たせるのに十分だった。

「うわあ、すごいですね、牛島さん！ 僕、こんなに沢山の船を見たの、初めてです！」

直也がまだ見ぬ大地に想いを馳せていると、突然大きな声が響き渡った。

「こら、若松！ 勝手に近寄るな！ あ、これは広瀬殿。新人が失礼をいたしました」

「君が若松くんか。貴船殿のばあさんの孫だろ？」

和馬は大声の主の噂を、とつくに耳にしているらしい。当たり障りのない笑みを浮かべながら、湊に話しかけた。

「僕、そんなに話題になっているんですか？ 何回もそう言われたんですけど」

「そりゃ、あの貴船殿が笑顔で話していた相手となれば、話題にもなるさ。都は初めてかい？」

「はい！ 珍しいことばかりで、昨夜は興奮して眠れませんでした！」

「あはは、元気がいいなあ。直也、少しこの辺りを案内してやれよ。かまわんだろ、牛島」

「はい。道に迷うなよ、若松」

「はい！」

「牛島は、一緒に茶でもどうだ」

「すみません。せっかくですが、すぐに隊舎へ戻らなければならんです。今度、ぜひ一緒にさせてください」

そう言って、牛島は足早に歩いていった。

「じゃあ、行こうか。広瀬さん、一時間ほどで戻ります」

「ああ」

「よろしく願います。えっと……」

「ああ、俺は水越だ」

「水越さん、よろしく願います!」

なんだか素直で、ちよつと面白い奴だなあ。もしかして、広瀬さんもこんなふうに俺を見ているのかな。

そう思うと、直也はなんだか胸の奥がくすぐったくて、口の端がわずかに上へ動いてしまった。

「牛島さんの班はどうだい?」

直也は、湊を海守の丘という場所に連れて行こうと思った。小高い丘からは港の景色がよく見えて、途中にも色々な店がある。雪菜だったら全く興味を持たないような類の店ばかりだが、湊なら幾つか気に入る店もあるだろう。

「まだ、よく分かりません」

「あはは、そりゃそうだ」

「殺された原口さんって人、水越さんはご存知ですか?」

「いや、俺は全く知らないな」

声に緊張感が混じっていたかもしれない。直也はしまったと思ったが、湊は全く気付いていないようだ。

「昨日、牛島さんが色々と教えてくれました。野犬に食い散らかされてはいたけれど、殺人の証拠らしきものがあるそうです」

「ふーん……。それは、なんだい?」

「背中に貫通した刃物の後があるそうですよ。それと背中側の肋骨に少しだけヒビがはいっていたので、間違いないだろうって」

「そうか」

背中側の肋骨にヒビ……。

やはり犯人は、刀を使った男か……?

直也の口数が減ったのを、変だと思ったのだろう。

「あの、僕、なにか失礼なことをしましたか?」

湊が心配そうにたずねた。

「いや。そんなことはないよ」

そうは言いつつも、直也の気持ちは重くなるばかりだ。

湊は直也の否定に安心したのか、すぐに笑顔になった。そして初めて見る店の品々に、目を丸くして驚いていた。

直也が造船所に戻ると、和馬が書類を用意して待っていた。

「直也、悪い。これを小早川殿に届けてくれ。神原と貴族の手の者には、気を付けて行けよ」

「はい」

書類を受け取りながら、直也は変化してしまった自分の感情を、改めて認識する。

広瀬さんじゃない。そう信じたい。

そして、思う。

いつか、この迷いをふりきる答えが出るのだろうか。

たとえ出たとしても、果たして自分は受け入れられるのか。

もしも一番認めたくない現実をつきつけられたら、俺はどうするのだろう。

街の喧騒にさらされながら、直也は同じ問い掛けを何度も自分に投げつけた。

第十話 過去の楔（１）

織音が外に出てみると、英樹が小さな池を眺めていた。

「ねえ、何してんの？ 寒いでしょ。中に入ったら？」

背中に抱きつき、腕を英樹の胸に回す。いつも顔をしかめている英樹だが、この家で二人きりの時には緊張感が消えている。突然抱きついて、体が強張ることはまずない。

「そうだな」

織音の言葉に、英樹の雰囲気が和らぐ。

「お風呂を沸かしたからさ、一緒に入ろうよ。こんなところにいたから、体が冷えちゃってるよ」

英樹がゆつくりと振り向いた。そして、織音の体に英樹の腕が回される。厚い肩に頭をのせると、大きな手が織音の頭をそっと包んだ。

「織音」

「二人でいる時はその名前で呼ばないって、約束したじゃない。今は神原の歌い女じゃないんだから」

「美乃里、将一はまだお前のことを諦めてはおらんのか」

「うん……」

織音の心の揺らぎに呼応したかのように、湯船いっぱいのお湯が波打った。

「まだ色々と言ってくるね」

「そうか」

「気にすることないわよ。あの人、他に四人も口説いている女がいるんだから。あたしのことがばれたって、じゃあ次にいくか、で済むわよ」

「そう簡単にはいかぬ。将一の面子というものがある。仕方ない。お前のことはもうしばらく隠しておこう」

「ふーん。あたし、まだ隠される存在でなきゃいけないんだ」

「美乃里」

「仕方ないけどさ」

「もうしばらく辛抱してくれぬか。それよりも、この家に住むという話は考えたか？」

「うん……」

「ここに住めば、いつでも会えるではないか。そうすれば、お前も寂しくあるまい」

「逆だよ」

「なにがだ」

「ここに独りで住んであんたを待つほうが、よっぽど寂しいよ」

「理由がわからん」

「いつ来るか分かんないあんたを、ずっと待つんだよ。ちょっとした物音でもあんたが来たんじゃないかって、神経をとがらせちゃうよ。そんなの、いやだな」

「そうか……」

英樹は黙った。その表情は、庭に佇んでいた時と同じものだ。織音は英樹の頭を胸に抱き寄せて、髪を梳く。

「ねえ。さつき、何を考えていたの？」

「たいした事ではない」

「けどあんた、哀しそうだったよ」

「そんなことはあるまい」

「ううん、哀しそうだった。こうやって抱き締めなくなっちゃうくらい」

「……昔の事を思い出してただけだ」

「昔の事って？」

「正月には毎年祖父の家へ挨拶をしに行く習慣だったが、一番に着いたのに、本家の将一が先だと言われ、一時間ほど待たされたことがある」

「なに、それ。感じ悪いわね」

「あの時が、己の立場を自覚した最初だと思つてな」

織音は英樹を強く抱きしめた。

「美乃里？」

「あたしが側にいれば、こうやって慰めてあげられたのに」

英樹は笑い、織音の胸に顔を埋める。

「おまえとこうやって、二人だけで生きていければよいのにな」

「本当にそんなことを思うの？ 歌い女のあたしと？」

「当たり前ではないか」

「そっかあ……。そうなんだ」

織音はもう一度、英樹をぎゅっと抱きしめた。

「どうした？」

「嬉しい。あたし、嬉しいの……」

織音の瞳からこぼれる涙。白い肌を伝わって、湯の中で溶けていく。

英樹の唇が、頬の涙をすくった。柔らかいその感触に、織音の心は安らいだ。

「おまえのためにも、俺は己の心に負けはせん。どんな甘言をささやかれようと、俺は……」

英樹の腕が、織音の肩に回される。そして、きつく抱きしめられた。

「英……」

織音は言葉を続けることができなかった。英樹の唇が重なって、織音の疑問を封じ込んでしまふ。いつになく激しい愛撫が、心の内にしまいこんだ英樹の葛藤を物語っていた。

「英樹……」

織音は全身で、それに応える。

もつと強くあたしを抱きしめて。

あんたの心が、あたしの肌であたためられるように。

あんたの苦しみが、あたしの汗で流されてしまふように。

浴室にこもる湯気が薄い雲となり、外に流れていく。けれど汗を

かいた身体には、冷えていく空気が気持ちいい。

やがて、心地よい疲労が織音に訪れる。

英樹の胸に頭を預け、織音は気だるい陶醉に身を委ねた……。

第十一話 過去の楔(2)

吉住が街を歩いていると、菊花が和菓子店の前にいた。暖簾をくぐり、店内へ入っていく。この店は雪菜が好きな菓子を何種類もおいてあるので、菊花がよく買いにくると聞いてはいたが、ここで会うのは初めてだった。

「藤枝さん」

店に入り声をかけると、菊花が驚いた顔をする。

「渡部さま。お菓子屋さんでお会いするなんて」

「藤枝さんが入っていくのを見かけたからですよ。雪菜さまのおやつですか？」

「ええ。雪菜さまも来たがっていらしたのですが、ここに来ると、あれもこれもと欲しがられるので、今回はお留守番です」

「雪菜さまは、何でも買えるご身分ですからね」

「でもお小遣いの額は、そんなに多くはないんですよ。貴船さまが厳しく監視していらっしゃるし」

「それは大変そうだ。ところで、藤枝さんは何が好きです？」

「今の季節なら、あれかしら」

菊花が指したのは、芋を甘く練りこんで、冷やして固めたあと蜂蜜をつけて焼いた菓子だった。

「じゃあ、それを十個包んでくれ」

吉住が店員に告げる。

「渡部さま？」

「雪菜さまには内緒ですよ。これ以上甘いものを召しあがるのは、お体によくない。侍女達で食べてください。十個で足りるかな？」

「ありがとうございます。雪菜さま付きの者で分けますから、十分です」

「今度は俺が持ち帰れる時に、沢山買っていきますよ。その代わりといっってはなんですが、時間があるなら、ちよっとお茶でも付き合

ってください。次の約束まで、一時間ほどあるんです」

「はい。喜んで」

菊花が注文した菓子を吉住が受け取り、店を出る。三分ほど歩くと、きつい視線を感じた。気配を探ると、和馬が武具店の軒先に立ち、こちらを見ている。

背の高い吉住が大通側を歩いているせいだろうか。菊花は和馬に全く気付いていない。吉住は何も気付かないふりをして、菊花と談笑した。

「落ち着いていて、いいお店ですね。」

「やっぱり女性は、こういう店が好きですか？」

「ええ。食器もすごく可愛い。渡部さまは、色々なお店をご存知ですね」

「商人は、こういう店にも詳しくてね。彼等に教えてもらうんですよ。ここに入った時は、藤枝さんを連れてきたら喜ぶだろうと思っていました。ところで、まだ顔色が良くありませんね」

「そうですね？」

「ええ。元気ありませんよ」

「まだよく眠れないからだと思います。だけど、大丈夫です」

「大丈夫、ですか……」

「渡部さま？」

「俺の母も、よく大丈夫と言っていました」

「お母さまが？」

「俺の母は地方の豪族の娘だね。父は下級貴族でした。母が御所に勤めていて、知り合ったようです」

菊花の手の動きが止まっている。吉住がこんな話をするのは初めてなので、驚いているのだろう。しかし吉住は、かまわずに話を続けた。

「身分違いの結婚だね。母はずいぶん苦勞したそうです。結局、俺が十歳の時に両親は離婚し、母は実家に戻りました。裕福な家だ

つたので生活には不自由しませんでした。やはり肩身が狭かったのでしょうか。よく大丈夫、大丈夫と言っていました。あれは俺にではなく、自分にいいきかせていたんでしょうね」

「渡部さま……」

「だから俺は、女性の大丈夫が心配なんです。藤枝さんも、無理をしないでください。辛ければ、いつでも俺を頼って欲しい。そう思っています」

「ありがとうございます」

「つと、そろそろ時間だ。誘っておきながら慌しくて、申し訳ない」
「いいえ。渡部さまの意外なお話も聞けましたから」

吉住は勘定を済まし、菊花と外に出た。

「荷物が重いから、本当は屋敷まで送ってたんですが」

「お心遣い、ありがとうございます。ねえ、渡部さま……」

「なんですか？」

「お仕事にやりがいを感じていらっしゃいますか？ 充実されていらっしゃいますか？」

「充実はしていますよ。登り進む橋の家臣ですからね」

「そうですね……。あ、ごめんなさい。お約束があるのに。今日はありがとうございます」

「こちらこそ。よかったら、またつきあってください」

「はい」

菊花は手を振って帰り道についた。菊花のその姿が、とても可愛らしい。

吉住も小さく手を振りかえした。

だが、道を歩くうちに、吉住の雰囲気が変わり始める。

あらゆるものの全ての隙を狙うかのような目付きになり、口元が引き締まり、そして戦いを挑む顔付きへと変貌する。

その表情のまま吉住は路地裏へと入り、細い道を歩き続け、生垣に囲まれた小さな家の前で止まった。人目がないことを確認すると、吉住は玄関を開ける。

昼だというのに、家の中は薄暗い。その家は、雑踏から切り離された空間に存在していた。

「魚沼さま。ご足労をおかけしまして、申し訳ございません」

吉住は恭しく頭を下げて、挨拶をした。相手は豪華な衣裳を身につけた、上流貴族の男だった。

第十二話 過去の楔（3）

あーあ。なんだか昨日から、なんにもやる気が起きないなあ。

雪菜はため息をつきながら東屋で仰向けになり、足を上に伸ばしたり、下に向けたりしていた。

静かで小さな空間が、とても心地いい。外国風の建物も、雪菜がここを気に入っている理由のひとつだ。

こんな格好しているところを菊花に見られたら、行儀が悪いって怒られちゃうな。そういえば、そろそろ帰ってくる頃じゃない？

おやつはなにかなあ。

「ゆ……雪菜……」

あれ？

聞き覚えのある男の声が戸口から聞こえる。見ると、直也が真っ赤になりながら立っていた。

「どうしたの、直也。海神に行ってるんじゃないの？」

「い、いいから、足、降ろせ」

珍しく直也がもっている。

「ん。わかった」

「し、失礼した。今のことは誰にも話さないでほしい」

「いやいや、いいもん見させてもらいました」

「正弘！」

直也に隠れて見えなかったが、戸口の外で男女の声がした。

「誰がいるの？ 直也、海神は？」

「小早川殿に用事があって戻ってきたんだ。雪菜のところに寄ったら、北庭の東屋にいるって言われて、探していた。一緒に夕飯を食べてから戻ろうと思って。あ、藤枝さん、ここです。こっちの東屋でした」

「珍しい、直也がそんなことを言うなんて！」

雪菜は飛び起きて、直也にまわりつく。

「ねえねえ、直也はなにが食べたい？　それとも、今日はあたしになにかつくろつか？　直也はあたしのつくった料理を食べたことないでしょ？　あ、菊花、寒いのに探させちゃって、ごめんね」

雪菜が戸口の外をのぞくと、菊花が立ちつくしていた。視線は、さつき直也と一緒に来た女に注がれている。

「菊花お嬢さま……」

女はかすれた声で、そう呼んだ。

それを聞くと菊花は二、三步後ずさり、背を向けて走り出す。

「菊花、どうしたの！　直也、この人達、だれ？」

「この前亡くなった原口さんの家の人に頼まれて、遺品を取りに来たと言っていた。広くて帰り道が分からないと言っから、見覚えのあるところまで一緒に行こうと思っているんだが」

原口つて、あの？

「すみません、今の方は白峰菊花さまでしょうか」

「ううん。藤枝菊花だよ」

「藤枝？　広瀬ではなくて？　では、広瀬さまとはご結婚されていますしやらないのかしら……」

え……？

今、広瀬つて……。

「彼女は独身です。それより広瀬とは、広瀬和馬のことですか？　笠原村の領主をしていた」

「ええ、そうです。広瀬さまもこちらのお屋敷にいらっしゃるのですか？　広瀬さまは、他の方とご結婚されていていらっしゃるのですか？」

「いえ、広瀬さんも独身ですが」

「じゃあ、何故お二人は一緒にならないんでしょう……」

「ねえ。ちよっとその話を、中で聞かせてくれない？」

雪菜がそう言うと、女は男と目を合わせたが、すぐに頷いた。

「わたくしは三田玲子と申します。こちらは三田正弘、わたくしの

夫でございます。わたくしは白峰家で、幼い頃から働いておりまして」

「菊花は白峰って名前だったの？」

「はい。付近の信仰を昔から集めていた、由緒ある大きな神社の一人娘でいらっやいます。あの近辺の中心は笠原村でしたので、ご一家は何代も前からそこに住まれ、村の総代もなさっていました」

「どうして菊花は逃げ出したのか、知っている？」

「さあ。わたくしにも理由が思い当たりません。でも、もしかしたら、笠原村のことを思い出されたくないのかも……」

「思い出したくないほどのことが、笠原村であつたんですか？」

直也の質問に、玲子は肩をびくつかせた。

「そう……ですね。菊花さまにとって、とても辛いことがありました」

「辛いことって？」

雪菜の問いかけに、玲子はしばらくの間床に視線をさまよわせていた。

直也は黙っている。雪菜も玲子を急かさない。

そんな様子に安心したのだろう。

「あれはもう、十一年も前のことになります……」

しまいこんだ昔日を探しながら形にする。そんな目をしながら、玲子はゆっくりと話し始めた。

第十三話 過去の楔（4）

笠原村は長い間、都の貴族が支配する領地でした。けれどその貴族が没落し、新興勢力の広瀬家が新たな支配者となったのです。

「ねえ、玲子。新しいご領主さまのところに挨拶に伺うんですって。着物はあたしのを貸してあげるから、一緒に来てね」

「菊花の着物では柄が若すぎますよ。いらっしやい、玲子。わたしが昔着ていたものを、一枚あげましょう」

わたくしは奥さまと菊花さまの外出時にお供を命じられることが多く、偉い方のお屋敷へ伺う時などは、奥さまが着物をくださることも珍しくありませんでした。

奥さまがくださったのは、美しい菖蒲色の着物でした。わたくしはそれを着て、挨拶に同行いたしました。

一方菊花さまは、桜色の地色に珊瑚色やたんぽぽ色など、少女らしい色を多用した百花模様の着物をお召しになり、女のわたくしですら眩しくて目を細めるほど、それは華やかで愛らしくていらっしやいました。

そして、どこもかしこも爽やかな風が通り抜け、村中が生き生きとした青葉で飾られている中、和馬さまが笠原村においでになったのです。そのお姿は大層若々しく、この方は輝いた道を歩むにちがない。そう思わずにはいられないほど、凛々しくていらっしやいました。

馬の背から、館の前に立っけいらっしやる白峰家の方がお見えになったのでしよう。和馬さまは馬から降りられ、会釈をくださいました。

この出来事に旦那さまが感心され、この後、和馬さまは白峰家のご協力を得ることがお出来になったのでございます。

白峰家の協力を得たことは、和馬さまにとって大きな力となりました。

といいますのも、笠原村における事実上の支配者は白峰家であり、以前のご領主も、領地内のことは全て白峰家に一任されていたらしいやいました。それでずっと上手くいっていたのです。ですので、和馬さまが新しいご領主とはいえ、村人達は侵入者を迎え入れるような気分でした。

しかし、実力者である白峰家当主の力により、和馬さまは新たな支配者と認められることができたのです。

「ねえ、和馬さまって全然威張っていなくて、感じのいい方ね。よかった」

菊花さまも、和馬さまの親しみやすさを無邪気に喜んでいらつしやいました。そして村に溶け込めるよう、なにかと心を砕き、一生懸命にお世話をされていらつしやいました。

だんなさまはもとも大人しいご性質のお方でしたので、和馬さまとの間に権力争いのようなものも特には起こらず、大変和やかにその夏は過ぎていきました。

けれども、わたくしは不安でした。菊花さまを初めてご覧になった時の、眩しそうな和馬さまのお顔。

あのように美しく可愛らしい方が、笑顔でお世話をされるのです。

和馬さまが菊花さまに惹かれてしまうのではないか。そう思っております。

奥さまも同じことを感じていらしたのでしょうか。肌寒くなる頃から、菊花さまが和馬さまのもとを訪れることに、いい顔はなさらなくなりました。なぜならば、菊花さまには決められた許婚がいらしたのです。

けれど、足下が紅葉で染まる頃　とうとう和馬さまが、菊花さまと結婚したいとだんなさまに話されました。

「ありがたいお話ですが、菊花には許婚があります」

菊花さまは一人娘のため、今度の冬には婿殿を迎えることになっていらつしやいました。

「その男とは会ったこともないと聞いている。なんでもしよう。どうにかその縁談を断ってくれないか」

「和馬さまのお立場ならば、菊花を側室として召し上げることおできになりますのに、このようにお心を尽していただきますことを、まずは御礼申し上げます」

「では……！」

「申し訳ございません。娘のことはお諦め願えませんか」

「お父さま！」

「広瀬さまは、誠実で優しいお方でいらっしゃいます。本来ならばこちらが頭を下げて娘を頼みますのが筋かもしれませんが。広瀬さまが通常のご領主でいらっしゃるのなら、そのようにいたしました」

「何が気に入らないのだ」

「広瀬さまは、これから幾度も戦に赴くお方。命の危険にさらされる度合いは、我ら村の者とは比較になりません。菊花は情の深い娘でございます。いつも広瀬さまの御身を案じ、不安な毎日を過ごすことになりましょう。まして広瀬さまに万が一のことでもありましたら、どれほど打ちひしがれることか。わたくしどもは、そのような娘の姿を見ることがなによりも辛うございます」

「……」

「どうぞ、愚かな親心をお察してください」

広瀬家は橘家の家臣として、討伐隊に加わることが既に決定していたそうです。頭を下げるだんなさまを前に、和馬さまは何もおっしゃいませんでした。ただ拳を握り、唇をかみしめていらっしゃいました。

「菊花さま。そのお荷物は何？」

和馬さまが帰られたあと、菊花さまをお慰めするために部屋へ伺いますと、大きな荷物がありました。

「なんでもないわ」

「……和馬さまのところに行かれるおつもりですか」

「あたし、和馬を待っていていられるわ。和馬のためなら、なんでも我慢できるわ!」

「いけません、菊花さま!」

「どいて、玲子!」

「玲子、手を離しなさい」

わたくしと菊花さまがもみあっていると、静かな声がいたしました。

奥さまのお声でした。

第十四話 過去の楔（5）

突然現れた奥さまに、菊花さまとわたくしの動きが止まりました。

「菊花、お座りなさい。玲子、お茶をいれてちょうだい」

「は、はい、ただいま」

わたくしは慌てて湯呑みを用意し、お茶を注ぎました。その間、奥さまも菊花さまも、一言もしゃべりませんでした。

湯気がたちのぼる暖かい湯呑みを両手でくるみ、菊花さまの昂ぶった感情も少し落ち着かれたのでしよう。荷物を下に置き、松葉色のお茶を少しずつお飲みになっていらつしゃいました。

「菊花。おまえ達が本気で想いあっていることも、広瀬さまが誠実な方だということもよく分かっています」

「だったら、あたしを和馬のところにかせてくださるでしよう？

和馬はあたしのために家を捨てると言ってくれたわ」

「落ちつきなさい、菊花。あなたは好きな方と一緒になれば、たとえ苦労しても幸せかもしれない。けれど、広瀬さまはどうかしら」

「え……」

「広瀬さまが家を捨てるというのは、今持っているものを全て捨てるということ。領主という地位と広瀬家での未来を捨てるということでしょう」

「でも……！」

「今は討伐隊参加準備のために、広瀬家全体が必死になっている時。そんな時に責任放棄した者をこころよく許してくれるほど、世の中は甘くありませんよ。一瞬の感情の為に行動した広瀬さまを、広瀬家はもう受け入れてくれない可能性だってあります」

「だけど……！」

「よく聞きなさい、菊花。男の方にとって仕事で成功するというのは、それは大きな価値を持つものなの。今ここで全てを捨てたら、広瀬さまは一から全てを始めなくてはいいけません。広瀬さまのお祖

父さまの代から始まり、広瀬家はここまで大きくなりました。今こ
こで全てを捨てたら、広瀬さまが今と同じ地位を得る頃には、人生
の終盤にかかっているかもしれないのよ。菊花は広瀬さまの側にい
れば幸せかもしれないけれど、男の方はそれだけでは足りないもの
なの。だから、菊花。広瀬さまの将来のために、駆け落ちはいけま
せん。お互いに辛いけれど、広瀬さまのために我慢してちょうだい」
奥さまの話聞いても、菊花さまは何もおっしゃいませんでした。
ただ、黙って涙を流されていました。

その後、お二人の間にどのような話し合いがあったのか、わたく
しは存じません。ですが、和馬さまは一人残されてしまうかもしれ
ない菊花さまのため、菊花さまは和馬さまの将来のため……。お互
いがお互いを思いやったのでしょ。

和馬さまが菊花さまを召し上げるとは、ありませんでした。

そして、細雪が舞い散る冬のある日　菊花さまはご結婚され
たのです。

その日は朝から大変冷えこんでいました。灰色の雲がどこまでも
空を覆い、昼だというのに、座敷には灯りがともされていました。

式の間中、菊花さまは一言もお話しになりませんでした。涙をこ
らえるのに精一杯でいらしたのでしょう。祝いに集まった人々の喧
騒も、違う世界の出来事のように感じていらっしやるようでした。

わたくしはだんなさまに言われ、お祝いの品を和馬さまのお館に
届けることになりました。和馬さまはその日、本家で大切な御用が
おありだということで、前の晩からお館を留守にいらしたので
す。

大層いやな役目でした。

けれど、ご領主の和馬さまを白峰家の婚礼において、ないがしろ
にできるわけがありません。

事情を知っているわたくしならば、不用意なことはするまい。

だんなさまは、そう思われたのでしょうか。わたくしは祝いの品を持ち、屋敷を出ました。

やはり和馬さまはお留守でいらっしやいましたが、祝いの品だけを留守居に預け、わたくしは帰路につきました。このように後味の悪いお使いは、初めてございました。

お屋敷に着く前に、わたくしは裏山にある神社へお参りをいたしました。

菊花さまのお心が、早く安らかになれますように。そしてお壻さまと幸せになれますように。

その願いを込めながら、わたくしは手を合わせたのでございます。顔を上げたわたくしは、ある人影に気付きました。それは、ご本家に行かれていますはずの和馬さまでした。

すでに雪はやみ、美しい夕焼けが山際に広がっております。夕空に描かれた緋色の熱情が、和馬さまの苦しみに引き寄せられたのでしょうか。

和馬さまの目は、真っ赤でいらっしやいました。

そして、いつも携えていらっしやる刀には、雪がやんだにもかかわらず、柄袋（注１）が被されていたのです。わたくしの怪訝な視線を感じたのか、和馬さまはこうおっしゃいました。

こうしておけば刀を抜きそうになっても、冷静になれる時間が少しできるだろう？

わたくしは、何も申し上げることができませんでした。

和馬さまの身の内に宿る激しい感情を、改めて思いしらされたのでございます……。

そんな日々の中、菊花さまはすぐにみごもられました。

和馬さまとの噂のせいか、菊花さまのご夫婦仲は、決して良いとは申せませんでした。

ですが、菊花さまは婿殿と仲良くされようと努力はしていらっしやったのです。しかし、努力だけでは上手くいかないのが、男女の

仲でございます。菊花さまの努力が、かえって嬪殿のお心を傷付けてしまったでしょう。お子さまが産まれる頃には、お二人の間にはどうしようもない溝ができていらっしやいました。

そして原口正造があ的事件を起こしたのは、菊花さまのご出産から数カ月後のことでした……。

注1 刀剣の柄を覆う袋。多く鐔^{つば}までかけ、雨・雪の日や旅行のときなどに用いた。

（大辞泉より）

第十五話 過去の楔（6）

その年は、いつもよりはるかに多く雨が降りました。重なる大雨に村人の不安が高まった時、村一番の年寄りでさえ経験したことがないというほどの大嵐がやってきたのです。

大木をなぎ倒す強い風、膚を破りそうな激しい雨……。

川の水量は恐ろしい勢いで増大し、災厄をふりまこうと舌なめずりをしているかのようでした。

やがてこの濁流は村の全てを飲み込んでしまいかもしれない。そうになったら我々はどうなるのだ。

誰も口にはしませんでした。皆が同じ不安を抱えておりました。そんな時、雨音の隙間にもぐりこむようにして、鐘の音が鳴り出しました。

川の決壊を知らせる警鐘でした。

もう、なにもかもがお終いだ。我々はこの村と共に滅びるしかないのだ……。

村人達に絶望がかけぬけたその時、村の男たちが集まった寄り合いの小屋の中で、正造がこう言い出したのです。

これは神の怒りに違いない。神を鎮めなければ、いずれこの村は滅ぼされてしまうだろう。

では、どうすればいいというのだ。おまえに策でもあるというのか。

ああ。あるとも。

なんだと！ 早く言ってみろ！

童年の無垢な赤子を神に捧げ、怒りを鎮めていただくのだ。幸い、長年この付近を守護してきた神社の赤子は、童年である。神も喜んでお受け取りくださるだろう。

それを聞き、ふらりと立ち上がる男が数名いました。

村人達の精神状態は普通ではありませんでした。いつ雨が止むと

もしれない孤立した村の中、不安にさいなまれた人間が負の感情に支配されていたのです。

希望を失い、正造の言葉にすぐる男達が、他の者の制止もきかず神社へと向かいました。

その時神社には、白峰家の方達と数名の年老いた下男しかおりませんでした。若い男達は防波堤を築く手伝いに出てしまっていたため、押し寄せる男たちを止められる者が誰もいなかったのです。

男達は立ちほだかる下男を鋏^{くわ}で殺し、赤子を抱えて逃げようとするだんなさまと奥さま、それに婿殿までもその手にかけたのです。わたくしは菊花さまと倉の中に入っていたため、難を逃れました。

外の騒ぎにわたくし達が気付き、倉から飛び出してみると、男達が赤子を手にして走り去るところでした。

視界も遮るほどの大雨の中、菊花さまは裸足で男達の後を追いました。わたくしも必死に走りました。けれども相手は村の男、複数名。女二人では、あまりに心もとない。わたくしは、全てを諦めかけました。

その時でございます。村の会合に出ていたわたくしの夫が、事の次第をお館にお伝えし、事件を知った和馬さまが菊花さまのもとに駆けつけてくださったのです。

和馬さまは菊花さまとわたくしを馬にませ、正造等を止めるために供の方達と急がれました。そして崖にいる正造のところにとどり着くと、大声で叱咤なさいました。

けれど正造は薄笑いを浮かべたまま、嵐の中を立っていました。それを見て、やはり正造は白峰家を潰すつもりなのだと、わたくしは確信いたしました。

正造がこのようなことをしでかす予兆はございました。神社の実務をやってきた正造は、ずっと白峰家の財産を狙っていたのです。確実な手段は菊花さまと結婚することでしたが、温厚なだんなさまも、さすがにそれは許されませんでした。

奥さまは以前から正造の動きに不信感を抱かれ、実の兄上にもご

相談されていたようです。

その動きを察知した正造は、なんとかして白峰家の実権をのつとろうと画策していたのでしょう。正造はこの災害を、白峰家を葬る最大の機会だと思ったに違いありません。

それにしても、菊花さまの懇願やたくしの罵りですら、野望を鼓舞する歌声にでも聞こえていたのでしょうか……。正造は恍惚の表情を浮かべていました。場にそぐわないその不気味さに、全員が凍りつきました。

しかし……。

「荒ぶる神よ、無垢な幼子を受け取りたまえ！」

いきなりそう叫んだかと思うと、赤子を乱暴に川へ放り投げたのです。

菊花さまは泣き叫ぶ赤子に、必死で腕を伸ばされました。和馬さまが押さええていなければ、正造もろとも濁流に身を投げかねない勢いでいらつしやいました。

菊花さまの絶叫、男達の怒声……。

嵐の中ですら容易に聞き取ることのできる罵声が、正造に浴びせられました。しかし、そんなものは正造にとってなんの意味もありません。それどころか、泣き崩れる菊花さまにこう言ったのです。「何をお嘆きになります。これでお二人の邪魔をする者が全て消えたではありませんか。むしろ私に感謝してほしいくらいですな」

供の者が止めなければ、和馬さまは正造を斬り殺していたでしょう。

和馬さまは放心状態の菊花さまを、お館に連れて帰られました。

おそらく、このまま和馬さまとご一緒になるだろう。

わたくしも村人も、そう思いました。

正造の言葉は、今思い出しても腹がたちます。ですが、家族を失った菊花さまにとって、それが最良の選択であることは確かです。わたくしはそのつもりで、白峰家の整理を始めました。

実際、白峰家のお葬式は和馬さまが出されたようなものでした。

村人たちも、お二人の今後については、もう決定したものと思うようになつたのです。

第十六話 からまる鎖（１）

やがて村の復興が本格的に始まりました。あのようなことをしかしたとはいえ、村で一番金策に秀でていたのは正造です。和馬さまは正造を資金運用係に任命されました。正造はそらみたことかと村中に触れ回っておりまして。

しかし今にして思えば、あれは和馬さまの仕掛けた罠だったのでないでしょうか。

お金に汚い正造は、復興資金を横領したのです。和馬さまは正造の全財産を没収し、村から追放いたしました。

村人は誰も同情いたしませんでした。

しかし、正造が追放された翌日のことです。菊花さまのお姿までもが、和馬さまのお館から消えてしまいました。

和馬さまは必死に探されました。そして数日後に、白峰家と親交のあった藤枝さまから、菊花さまを預かっているとの連絡があったのです。

和馬さまは直ちにそこへ向かわれました。わたくし共は菊花さまをお迎えする準備を整え、お二人のお帰りを待っていました。

けれど、和馬さまは一人で戻っていらつしました。村人は、和馬さまが白峰家の菊花さまを妻にされ、名実ともにこの村の支配者になるだろうと思っておりましたので、皆驚きましたが、和馬様は淡々とおつしやいました。

菊花はもうこの村には戻らない。神社は総大社からしかるべき神官にきていただき、村を守ってほしい。

それが伝言だとおつしやるのみです。

腑に落ちない話でしたが、あのようなことがあったからにはそれも無理からぬこと。時が経てば菊花さまも落ち着かれるだろうと話し合い、和馬さまに全てをお任せすることになったのでございます。その後、わたくしは夫と共に都へと出てまいりました。なかなか

商売がうまくゆかず困っていた時に、正造の新しい奥さんが「主人の同郷なら」と、正造に内緒で助けてくれたのです。正造のことは今でも憎んでおりますが、何も知らない奥さんに罪はなく、また、わたくしどもを助けてくれた恩もあります。今回の事件で動転している奥さんに代わり、わたくしどもがこのお屋敷に伺いましたのは、そういった理由からでございます。

「わたくしが知っておりますのは、ここまででございます。わたくしが村を離れた後のお二人については、何も存じません。けれど、菊花さまのご無事なお姿を拝見できて、本当にようございました。菊花さまのことは、ずっと気掛かりでございましたので」

雪菜はなんとやっていいのか、分からなかった。

母の静養先だった森代という避暑地で、雪菜は菊花と出会った。

その頃、父と兄が討伐隊に参加していたため、雪菜は毎日神社へ出かけては無事を祈っていた。そこに菊花がお参りに来ていて、雪菜が話しかけたのだ。それが、知り合ったきっかけだった。

母は病気で、父と兄は戦に出かけている。

幼い雪菜は不安を抱えながらも、日に日に弱っていく母を安心させるために、いつも元氣なふりをしていた。雪菜が泣ける場所は、菊花のところだけだった。

じゃあ、菊花は……？

菊花が泣ける場所ってどこだったんだろう。ずっと独りで耐えていたんだろうか。あんなに辛い目にあったのに……。

「すみませんが、原口さんの遺品を見せてもらえますか」

直也の声で、雪菜はハツとした。いつの間にか泣いていたらしい。頬が濡れていて、言葉がとっさに出てこない。

正弘が荷物を開いている間に、直也の指先が雪菜の頬をぬぐう。

「直也……」

直也は袖を持って、もう一度雪菜の涙を拭いた。

「そうしていらっしやいますと、昔の菊花さまと広瀬さまを思い出します……」

玲子の目も潤んでいた。

「ですが、未だにお二人が一緒になれない理由が、何かあるんでしょうねえ。本当に男女の仲は難しいこと……」

「遺品といっても、こちらへは旅に必要なものしか持ってきておりませんから、こんなものしかありませんが」

正弘が広げた風呂敷には、簡単な日用品と安い脇差が一本あるだけだ。

「脇差に触ってもいいか？」

「どうぞ」

直也が鞘を取り、刃先を眺めている。

「ありがとうございます。使った跡がないな」

「原口はこういった方面はさっぱりでしたんで、形だけの護身用でしょう」

「そうらしいな。ああ、門まで一緒に行こう。雪菜、悪い。このまま海神へ帰るから」

「ええっ！ さっき、夕飯と一緒に食べるって言ったのに！ それに、こんな話を聞いても菊花に何も言わないの？ 一言くらい、声をかけてあげないの？」

「ごめん、急用ができた」

「信じらんない！」

近付いたかと思うと、突き放される。その繰り返しじゃない。

「どうしても確かめたいことがあるんだ」

「もう、いい！ 直也の好きにしたら？」

それだけ言うと、雪菜は駆け出して坂道をくだる。

「雪菜！」

後ろから直也の声が聞こえた。

だが、雪菜に足を止めるつもりは、これっぽちもなかった。

第十七話 からまる鎖（２）

「足の早い娘さんですなあ」

「追いかけてよろしいのですか？」

「いえ、追いかけます。すみませんが、ここでちょっと待っていてください」

「わたくし共は別の方に道を聞きますよ。いやいや、若いとはいいですなあ」

「じゃあ、俺はこれで。時間をとらせてしまい、申し訳ありませんでした」

「いいえ、とんでもございません。頑張ってくださいね」

夫婦の励ましに、直也は苦笑いを返す。

急いで道をくだと、雪菜が坂の下で立っていた。隣には泰史がいる。

「なんで、あいつが。」

雪菜は泰史の袖を掴みながら、一生懸命に何かを話していた。雪菜は意識していないが、あれは甘えている時によくやる仕草だ。

いきなり泰史がかがんで、雪菜の口もとに耳を近付けた。きつと、雪菜の言葉が聞き取れなかったのだらう。すぐに姿勢を戻した。だが、雪菜は泰史の袖を離そうとはしない。なおも話し続けている。

「雪菜！」

思った以上に、大声が出てしまった。

雪菜がびつくりした顔をして、直也を見る。

「雪菜、話をちゃんと聞けよ」

「命令しないでよ。直也に振り回されるのはもう、うんざり！」

「雪菜！」

こんな雪菜を見たことがない。

こんなにも全身で拒否されたのは、初めてだった。

「あたし、菊花のところに行かなきゃ。直也は海神に行くんでしょ。」

「じゃあ、気を付けてね。さようなら。ほら、行くわよ黒川さん」

「そう言って、雪菜は泰史の袖を引っ張った。」

「え？ 俺もですか？」

「当たり前じゃない。惣領の妹姫を一人で歩かせる気？」

「さつき、一人で坂をくだってきたじゃないですか」

「なんで意地悪ばかり言うの……！」

「はいはい、分かりましたよ。すみません、水越さん。失礼します」

雪菜は直也に背を向けて、早足で歩いていく。

その後ろ姿を見ながら、以前、和馬に言われたことを思い出した。

「おまえ、お姫さんの好意に寄りかかり過ぎじゃないのか。」

泣き出しそうだった雪菜の顔。

「やっぱり、そうなのかなあ……」

直也は独り言を言いながら、ため息をついた。

「変な意地を張らないほうが、いいと思いますよ」

泰史が、しょうがないな、といった顔をしている。

「意地を張っているんじゃないもん。怒っているんだもん！」

「まあ、ちようどいいか。これ、あげますよ」

泰史が手渡したのは、「ゆかり神社」と書かれたお守りだった。

「恋愛成就の神社ですよ。これをいつも身につけていると、想う相手と結ばれるそうです」

「……黒川さん、これに願掛けしていたの？ 相手は、どこの誰？」

「違いますよ。これは、雪菜さまのために手に入れたんです。水越さんの気持ちが分からないって、この前言っていましたからね」

「わざわざ手に入れてくれたの？ ありがとう、黒川さん！」

「いいですか。これはいつも身につけていて下さい」

「うん。わかった」

「そうしないと効かないそうですから」

「うん。じゃあ、そうする」

雪菜はお守りを胸元にいれた。

「これでいい？」

「いいですけど……。男の前ではそういうことをしない方が、身のためですよ」

「そういうもののなの？　じゃあ、気をつけるよ」

「ほら、部屋の前に着きましたよ。俺はこれでお役御免ですね」

「あたしから逃げたいように見える……」

「気のせいです」

「そっかなあ」

「かんべんしてくださいよ。俺、すぐに渡部さんと外回りに行かないといけないんですから、ごねないでください」

「直也も黒川さんも、冷たい……」

「その分、惣領殿が大甘じゃないですか。これで収支が合いますね」
「雪菜さま、どうなさったんですか。黒川さんとご一緒ですか？」

黒川さん、上がってお茶でもいかがですか？」

青白い顔をした菊花が、雪菜の部屋から顔を出した。

「こんにちは、藤枝さん。ゆっくりしている時間がないので、すみません失礼します」

「そうなんですか？　残念だわ」

泰史は菊花に軽く頭を下げると、足早に去っていった。

「なんだか、皆に冷たくされている気がする」

「なにをおっしゃっているんですか。気のせいですよ」

雪菜が部屋に入ると、菊花はお茶の用意をしていた。

第十八話 からまる鎖（3）

「先ほどは申し訳ありませんでした。あたしったら、失礼なことを」
「ねえ。菊花と広瀬さんって……」

菊花は動かしていた手を止める。

「玲子からお聞きになりました？」

「うん……」

菊花の指が茶器から離れた。

「どうしてお互いに関係ないふりをしているのか、気になりますか？」

雪菜は頷く。

「でも、言いたくないなら」

「……笠原村を出てから、一度だけ広瀬さまと結ばれたことがあります」

「え……」

「幸せでした。ずっと求めていた人の腕の中にいられて、こんな幸福があるのだと、あの時に初めて知りました。何もかも忘れて、この人になりたい。本当にそう思っただんです」

「菊花……」

「だけど明け方に、赤ちゃんの泣き声が……」

「赤ちゃん？」

「もしかしたら、仔猫の声だったのかもしれませんが。でも、その泣き声を聞いているうちに、あの子が死んだ時のことが、あたしの中でよみがえってきたんです。家族はあの子を守ろうとして、みんな死んでしまいました。それなのに、あたしはあの子を守れませんでした。そんなあたしが、自分だけ幸せになろうとしていいのでしょうか。そんなことが許されるのでしょうか」

「だって、菊花は悪くないじゃない……！」

「たとえそうだとしても、あの子を独りで死なせてしまったことま

で忘れようとした自分が許せないんです。こんな気持ちのまま、あの人の側にはいられません。私の苦しみをあの人にまで伝染^{うつ}すわけにはいきませんから……」

菊花はそう言ってうつむいた。

「だけど、広瀬さんの気持ちは？」

「……」

「広瀬さんは菊花の気持ちを最優先しただけじゃないの？ 広瀬さんは、今でも菊花のことを忘れていないんじゃないの？ だから誰とも結婚しないんじゃないの？」

「あたしは、あの人に辛い思いばかりさせてしまいました。もう、あたしとは関わらないほうがいいんです。それがあの人のためだと……そう思います」

「でも、それは……！」

雪菜は菊花の哀しそうな顔を見て、それ以上言うのは止めた。

「だけど、菊花、辛そうだよ。」

そんな顔をしてそんなことを言っても、納得できないよ。

広瀬さんにも、菊花の無理が伝わっていると思う。

本当に男女の仲は難しいこと。

あの人の言ったことは、本当だ。菊花も広瀬さんも、お互いのことを想い過ぎて、その想いが鎖となり、互いに身動きがとれなくなっている。

どうしたらいいんだろう。

どうしたら、体から想いの鎖がはずれるんだろう。

雪菜は菊花を見た。

菊花は視線に気付くと小首をかしげ、いつものように微笑いかけた。

それが哀しくて悲しくて、雪菜は唇を震わせた……。

真冬の夜明け前は、全身が悲鳴をあげるほど空気が凍てついている。湊は焚き火の近く立っていたが、それでも耳が痛くなってきた。

薄闇の中を、幾つもの影がうごめいている。吉住が率いる、牛島洋平班と池野文彦班の男達だ。

「渡部さま。牛島班が揃いました」

「よし。牛島班が追っていた七戸は、荒っぽい男だ。油断をするなよ」

「はい」

吉住と洋平は小さい声で話していたが、冴え凍った氷の刃が余分な音を削ぎ落とし、かえって声の通りをよくしていた。

先ほど七戸が仲間に会う、との密告があつた。吉住は彼等を急襲することに決め、牛島班と池野班に招集がかかったのだ。

洋平と話していた吉住の視線が、湊で止まる。緊張しか与えないその目付きに、湊は体を固くした。

「若松もいるのか。こういった現場には慣れていないだろう。大丈夫か？」

「意外と体力がありますので、連れてきたのですが。まるで姫君に対するようなお気の使いようでいらっしゃいますな」

「なにしろ、貴船殿のお気に入りだからな」

「大丈夫です。僕、やれます！」

吉住の言い方に少しムツとして、湊は強く言い返した。

「そうだな。これで手柄をたてたら婚約者も見直して、新婚生活は都で送ることになるかもしれんな。頑張れよ、若松」

「そ……そうですね」

僕が手柄を……。

そうしたら、彼女は喜んでくれるだろうか。すごい、と言って誉めてくれるだろうか……。

「僕、頑張ります！」

「はは、その勢いだ」

「渡部さん、もう出ませんと」

「ああ、わかった」

洋平が男たちを招集し、吉住の前に立たせる。湊は最後尾に立ち、

吉住の言葉を待った。

吉住がゆつくりと男たちの前を歩き出す。男たちの間で、緊張と興奮がとぐるを巻く。吉住が足を止めたのは、それらが全員に絡まった時だった。

「諸君。我々の目的は、この橋に不利益をもたらす者を捕らえ、厳罰を与えることにある。敵に情けをかけてはならんぞ。よいな！」

「はっ！」

「出撃！」

「おおっ！」

男たちの声が、残夜に響く。まだ明け方にもならないこの時間は、闇の名残が色濃く漂う。

それにあてられてしまったのだろうか。

湊は、未だ感じたことのない異様な炎が身の内にくすぶり始めていることに、戸惑いを感じていた。

第十九話 落滴（1）

「渡部さん、七戸が現れました」

小声で告げる男の視線の先には、短軀で恰幅のいい男がいた。

七戸の前には、背が高く痩せた男が立っている。川沿いに乱立している荷物小屋のひとつに、二人は入っていった。洋平が小屋の窓下にしゃがみ、中をのぞく。湊は小屋の周りを包囲しているため、薄暗い部屋の中がどうなっているのかよく分からなかったが、洋平は吉住のほうを向くと、小さく頷いた。

吉住が左手を振り、突撃の合図を出す。

今まで息をひそめていた男たちに、突然殺気が宿った。皆一言もしゃべらず、それぞれの班長のあとに続いていく。

心臓が鳴っている……。

湊の意識が己の体内に向かった。

そうか。心臓って、こんなに音が出るものだったんだ。

頭にも腕にも爪先にも、大きな鼓動が伝わってきた。

体中が震えている……。

ふと気が付くと、横に泰史がいた。

「黒川さん？」

「冷静になれよ」

それだけ言うと、泰史は先頭にいる吉住のところへ行く。とてもなめらかで、無駄のない動きだ。

冷静に……。

それは無理な話だ。凍てつく大気でさえぬくしてしまうような熱気の中にいて、どうして落ち着いていられるだろう。渦巻く熱が湊の鼻孔から入り、心をはやらすのだ。

「七戸雅也！ 橘まで来てもらおう！」

扉の開く音。洋平の太い声。

その声が、湊の体にこもった熱を上昇させる。

「逃げてください！」

雅也が背の高い男を逃がすため、洋平の前に立ちはだかった。

雅也は斬りかかる牛島班の男を蹴り、よろめいた隙にその男の胸に刀を刺し、右隣の男が斬りかかっても軽くよけ、背中に短剣を立てる。

あつというまに、二人が殺された。

「おまえたちは、背の高い男を捕えろ。あいつは殺すなよ」

吉住が前に出て、雅也を取り囲んでいる男たちに命令する。

「しかし……！」

「いいから、早くしろ！」

「はっ！」

洋平が奥の扉から逃げようとする男を追った。湊も慌てて後ろにつく。

走りながら吉住に注意を戻すと、雅也が刀をかまえ直しているところだった。

「大人しく捕まった方が身のためだぞ」

吉住の言葉など耳に入っていないかのように、雅也は吉住の動きを追っている。

「若松！ 気を散らすな！ きさまはこっちの男に集中しろ！」

「は、はいっ！ すみません！」

そうだ。僕はこの男を捕まえて、そして……。

湊の周囲の男が、じりじりと獲物ににじり寄る。

そう。

彼は獲物なのだ。

誰が捕えるのか、競争が始まっていた。

男たちの殺気と欲が、小屋いっぱいに充満する。

早くしなくては。

早く踏み込まなくては、手柄を横取りされてしまう。

僕が……。

僕が行くんだ。

そして、彼女を都に……。

「うわっ！」

湊の隣にいた男が大声を出し、慌てて右方へ飛びのいた。全ての意識を目の前の男に集中していた港は男が倒れてきたことに気がつかず、まともにぶつかってしまった。

湊の顔になにかが降りかかる。

「いってえ……」

顔に手をやり掌を見ると、真っ赤に染まっている。床に転がった男、七戸雅也は白目を剥いて、どくどくと血を流していた。

まだ温かい血。

雅也の執念を吸い取った赤い液……。

生温かくどろりとしたそれは湊の体内に侵入し、頭の中を這いずり回って中をかきまわし、そして神経に付着した。

「う……わああああっ！」

湊の中で、なにかが千切れて飛んだ。

「ばか、やめろ、若松！」

どこからか、声が聞こえた気がする。

「？」

胸に衝撃を感じた。熱く焼けただれるような、強い衝撃……。

「若松！」

「逃げたぞ、追え！」

なんだろう……

周りの声がどんどん遠ざかっていく……。

「馬鹿だな。もう殺られるなんて……」

殺られた……。

ちがう、僕はまだ……

あんたはお調子者だから、本当は都になんて行かせたくないのよ。でも、仕方ないわね……。

僕も本当は離れたくなかない。

だから、早く都へ呼べるようになるから……。誰にも文句を言わせないくらい、立派になるから……。

しつかりやるのよ。いい？

そう言っただけで泣いていたっけ……。僕がいなくなったら、きみは……。

「……」

「若松？」

「……」

きみ……は……。

湊の手が、刀から離れた。誰も湊をかえりみることのない喧騒の中で、泰史は湊の両目をそっと閉じてやった。

「もうこんな時間か」

気が付くと、朝の光が部屋の中に射しこんでいた。昨夜は雪菜のことや和馬のことが気になってよく眠れなかったせいか、少し頭が重い。

喧嘩の後、少し反省した直也は雪菜の部屋まで行ったのだが、新しい警護の青竹晴紀と菊花を連れて、外出してしまったという。

雪菜の怒った顔はよく見るが、泣き出しそうな顔は初めて見た。

あの顔が直也の心に棘となってつき刺さる。

雪菜。

小さい声でその名を呼んでも、元気な返事はかえってこない……。

「とりあえず、こっちが先だ」

直也は起き上がって顔を洗い、雪菜の幻影をどうにか振り切った。そして、和馬の部屋に向かう。

三田玲子から笠原村の話聞いた直也は、原口の殺人についてひとつの仮説をたてていた。

どうしてもそのことを確認したくて海神に戻ってきたが、和馬は酔って宿舎に帰ってきて、すぐに眠ってしまったと同僚が教えてくれた。

まさか上司をたたき起こすわけにもいかず、直也は仕方なく朝まで待つことにしたのだ。

今度こそ、確かめなくては……！

「広瀬さん、起きていらっしやいますか」

「直也か。空いているぞ」

中へ入ると、和馬が書類をみていた。

第二十話 落滴（2）

「もう仕事をしているんですか？」

「ああ。夜中に目が覚めちまったから、仕事をしていたんだ。もう屋敷へ帰れるぞ」

「広瀬さん、話があるんです」

「ん？ 深刻そうだなあ。お姫さんとの喧嘩の仲裁か？」

「屋敷で三田玲子という人に会いました。藤枝さんの家で働いていた人です」

和馬から、余裕の笑みが消えた。

「……それで？」

「三田さんから笠原村であつたことを全部聞きました。藤枝さんは、白峰という名前だったんですね。」

「昔のことだ。それが、どうかしたのか」

「単刀直入に言います。広瀬さんは、藤枝さんが原口を殺したと思っ
つていますね」

書類をつかんでいた和馬の指が、机の上に置かれた。

「なにを言つてんだ、いきなり。どうかしているぞ、直也」

「広瀬さんは藤枝さんをかばっているんです」

「面白いこと言うなあ。続き、聞かせてもらおうか」

やわらかい口調とは裏腹に、和馬の目付きが剣呑さを増していく。未だかつて直也には向けられたことのない、青い怒り。だが、直也はまっすぐに和馬を見て、その怒りから逃げようとはしなかった。「原口の死体が発見された日から、広瀬さんが犯人かもしれない、と思っていました。雪菜の部屋で原口への嫌悪をみせていたし、あんな顔であんなことを言うから、もしかしたら、と思っていたんです」

「あんなこと？」

“仕方ないでしょうな。天罰というやつですよ”

「あれは別にわざとじゃないけどな。思ったことを言っただけだし」
「そうかもしれません。でも、広瀬さんが原口を嫌う理由も知らなかったし、それが殺害に結びつくほど激しい嫌悪なのかどうかも分からなかった。なにがあつたのか尋ねても教えてくれないことは、雰囲気で分かっていました。三田さんの話を聞いたおかげで、やっと答えが出てきたんです」

「それが、さっきの質問か。直也。世の中には、言っていないことと悪いことがあるって知らんのかい？」

「言わなければ、この話は先に進みません」

和馬が腕を組む。その目には、敵に向ける鋭さが浮かんでいた。

「まあ、いい。それで？」

和馬の声に、緊張感が宿っている。追い詰められた時のものではない。攻撃する態勢をとる時の、張り詰めた空気と一緒のものだ：

…。

「広瀬さんはあの夜、藤枝さんをかばわなくてはいけないと思う、なにかを見たんです」

「ちよつと待て。なんでそこに菊 藤枝さんがでてるんだ？」

昔のことがあつたからといって、俺が彼女をかばっているというのは、飛躍しすぎじゃないか？」

「じゃあ、例えば広瀬さんが原口を殺つたとしましょう。だったら、なぜ自分が疑われるようなことを言つんです？ 広瀬さんが犯人なら、注意が自分に向かないようにするものじゃありませんか？ 雪菜の部屋でみせた嫌悪感を失敗したと思って、とりつくるうとするのが普通です。それをしないで、わざわざ自分に注意を向けるようなことを言うとなれば、誰かをかばっていると思うのが自然でしょう。原口が関係し、広瀬さんがそこまでしようとする人間となれば、藤枝さんしかいないじゃありませんか」

「……………」

「最初は、広瀬さんが藤枝さんと共謀して原口を殺したのかと思いました。だけど、それでは俺達の目を広瀬さんに向けさせた意味が

なくなる。ということは、二人は共犯じゃない。広瀬さんは、藤枝さんをかばわなくてはいけないと思うなにかを見たから、俺と雪菜の注意をわざと自分に向けたんです」

「なにかつて？」

「藤枝さんが原口と一緒にいる現場とか……」

「直也！」

和馬の大声に、直也は言葉を止めた。けれど、その声に含まれた愁嘆しゅうたんの響きが、それが真実に近いことを直也に確信させた。

「いい加減にしろ！ 今なら何も聞かなかったことにしてやる。いか？ この話は、ここまでだ！」

「広瀬さん。原口を殺したのは、藤枝さんじゃありませんよ」

「なんだつて……？」

和馬の目が、大きく見開かれた。

第二十一話 落滴（3）

「昨日、港を案内した若松から聞いたんです。原口の背中側の肋骨には、ひびがはいっていたそうです。原口は脂肪の多い、中年の男です。華奢な藤枝さんの力では、内臓を通過させて背中側の肋骨にひびをいれるのは困難でしょう。第一、原口が橘の屋敷に来ることを、藤枝さんは知っていたでしょうか」

「……………」

「原口が来ることを知っていたとしたら、あらかじめ刃物を用意したという可能性も否定できません。でも今の彼女に、辺境の倉庫長である原口のことを知る機会はないと思います。広瀬さんだって、雪菜の部屋で初めて知ったくらいですから。橘の屋敷で、突然原口を見かけたとしたら、藤枝さんはどんな行動をとると思いますか？」

「……………意外と気が強いからな。あとをつけるかもしれないな」

「俺もそう思います。でも藤枝さんは、短刀すら持ち歩く習慣はありません。もし自分の部屋に一本くらい置いてあったとしても、すぐに取り出せる場所にはしまっていないでしょう。それに男の足に追いつくためには、自分の部屋まで凶器を取りに行く時間はなかったと思います。おそらく、藤枝さんはなにも持たないまま原口を追った。原口はなぜか竹林に向かっていく。そこで藤枝さんと原口は対峙した……。なにが起きたのかは藤枝さんに確認するしかありませんが、そこで刃物を持った第三の人間が、原口を殺したのではないでしょうか」

「原口だって、脇差くらい持ち歩くだろう。菊花がとっさにそれを使った可能性が残っている」

「三田さんの話を聞いた時に、原口の脇差を確認しました。一度も使った跡はありませんでした」

「……………」

「広瀬さん。広瀬さんはあの夜、何を見たんですか？」

「……………」

「広瀬さん！」

「……菊花じゃないかもしれない……。そうか……」

和馬の手は震えていた。そして、声も上擦っていた

「やっぱり広瀬さんは、藤枝さんをかばっていたんですね」

しばらく机の上を見ていた和馬は、やがて低い声で話し始めた。
ぽつりぽつりと語る和馬の顔には、安堵感しか浮かんでいない。

いつもどこかに含まれている醒めた笑いは、感じられなかった。

藤枝さんと出会った頃の広瀬さんは、こんな顔だったのかもしれない。

直也は和馬を見て、そう思った。

「あの夜、名波に乗っている時に、竹林へ向かう原口を見かけた」

直也はなにひとつ聞き逃すまいと、全神経を話に集中させた。

「あいつが橘の屋敷にいることに驚いて、名波を馬小屋につないでから急いで原口のとを追った。すると原口が向かった竹林から、菊花が慌てた様子で走って出てきた。俺はとつさに隠れたが、菊花がいなくなってからそこを覗くと、原口が胸を刺されて死んでいた。俺はてっきり菊花がやったのかと思って、裏の門を開けたんだ」

「裏の門を？」

「そうだ。血の臭いをかぎつけて野犬がやってくる。そうすれば、原口の死体を食い散らかして、傷口も分からなくなるだろう」

「そして、不審の目を自分に向けさせた……」

「ああ。惣領殿に呼ばれたときも、菊花の話はいつさい出さなかった。ただ神社の一家としか言っていない。原口の話をしている時の俺が不自然なほど淡々としていることについて、誰か指摘をするかと……」

「広瀬さん？」

「いや……。なんでもない。菊花は俺に見られたとは、知らないはずだ。大分慌てていたし、竹林の中は暗かったからな」

竹林の中は暗かった……？

「ちょっと待ってください。それなら、別の人間が竹林に隠れていることに広瀬さんが気付かなくても、不思議じゃありませんよね」
「なんだって？」

「広瀬さんは、藤枝さんのことでかなり動揺していたはずです。普段なら闇夜でも人の気配に気付いたでしょうが、あの夜はそうはいかなかった」

「おまえ、けっこう言うな」

「茶化さないでください。結局、疑問は残ったままなんです。原口を殺したのは誰なのか。竹林の中でいったいなに起きたのか。原口は、橘の広い屋敷に初めて来たにもかかわらず、何故夜になつてから竹林へ向かったのか」

和馬の表情が、それを聞いて引き締まる。

「菊花に訊いてみよう。それが一番てつとり早い。すぐに屋敷へ戻るぞ」

「はい！」

やはり、犯人は広瀬さんじゃなかった。
本当によかった。

その気持ちで、和馬にも通じたのだろう。

「直也」

「はい」

和馬の手が、直也の背中を軽くたたく。
そして……。

ありがとう。

和馬の小さな声が、直也の耳に届いた。

部屋の中で、雪菜は横になっていた。
だるい……。

体が重いなんて、生まれて初めてだ。

「先生」

「大丈夫。たいしたことはありませんよ」

菊花の問いかけに、医者はのんびりと答えた。

「でも、雪菜さまの具合が悪くなるなんて、初めてのことなんです」
「顔色は悪くないですよ。疲れが出たんでしょう。まさか、怪我以外でこちらのお屋敷へ伺うことがあるとは、思ってもみませんでしたよ」

そう言うと、医者は声を出して笑った。

「のんきなことを、おっしゃっていいてください!」

「すみません……」

いつも穏やかな菊花に怒られて、医者が驚いている。

「雪菜さま。青竹さんと黒川さんが心配して、廊下で待っているんです。大丈夫ですと伝えて来ますね」

「黒川さんもいるの?」

「ええ。昨日、雪菜さまが落ち込んでいらつやだったので、様子を見にきてくれたんですよ。そうしたら、雪菜さまがぐったりなさっていて。青竹さんが先生のところに使いの者を出そうとしていたら、黒川さんがお医者さまを連れて来てくれたんです。あとでお礼を言ってくださいね」

「いま言うよ。中に入ってもらって」

「いけません。夜着じゃありませんか」

「大丈夫、大丈夫」

「聞こえましたよ。心配いらないみたいです」
泰史の声が聞こえた。

「あゝ、ありがとう、黒川さん。わざわざ寄ってくれたんだね」

「昨日、ちよつと冷たかったかと反省しまして」

「雪菜さまの警護を離れるわけにもいかなから、黒川が来てくれてボクも助かったよ。使いの者を呼ぶよりも、黒川が行ってくれたほうが早いもんな。あとで改めて……うわっ!」

「どうしたの……って、この足音は……」

「雪菜の具合が悪いとは、まことか!」

屋敷じゅうに響き渡るような足音をさせて現れたのは、橘家惣領の将一だった。

「惣領殿、病人のいる部屋では、もっとお静かに」

「び……、病人……」

医者言葉を聞き、将一は蒼白になる。

「雪菜、いつたいどうしたというのだ。風邪もひかないおまえなのに、食欲がないほど具合が悪くなるとは」

「わかんない……。ごめんなさい、お兄さま。心配をかけてしまつて」

「雪菜……。おまえがこんなにしおらしくなるとは。なにか欲しいものはないのか？ なんでも手にいれてやるぞ」

「ありがとう、お兄さま。でも、大丈夫。大したことはないって、お医者さまが言つてたし」

それを聞き、将一は医者を見た。その眼光の鋭さに、医者顔色が変わる。

「それは確かであろうな」

「は、はい。御婦人によくあります、体調不良ではないかと」

「万が一誤診などあったら、許しはせんぞ」

「は、はい」

「お兄さま、落ち着いて。あたし、すぐに良くなるから。ね？」

「いや、無理してはいかん。普段、腹痛すらおこさぬ頑丈な雪菜が、伏せるほど具合が悪いのだ。もしや、都の空気がおまえにあわぬのだろうか」

「うーん、今更つて気もするけど」

「惣領殿。それでしたらご静養を兼ねて、雪菜さまに山荘へお越しただいてはいかがでしょう」

泰史の突然の発言に、雪菜は驚いた。

第二十二話 落滴（４）

泰史の発言に、将一も意外そうな顔をしている。惣領と妹姫の話に割ってはいる者など、この橋にそうはいない。

「山荘？　もしか……」

「はい。伊部という商人から借りております、山麓の山荘でございます」

「確かにあの山荘なら女が好きそうな造りだし、静かだからゆつくりできるが」

「お兄さま、行かれたことがあるの？」

「あ？　ああ。真砂の帰りにな」

「これから戻る予定になっておりますので、差し支えなければ自分も警護に加わらせていただきます」

「どうする、雪菜」

「だけど、お兄さまがお忙しいのに、あたしだけ山荘でのんびりするの、ちょっと……」

「そんなことは気にせんでもよい。行つてきなさい」

「いいの？」

「今は山荘に寄る者も少ないでしょうから、雪菜さまもごゆっくりできるかと思います。それに女性が必要な物もあらかた揃っているようです、最小限のお荷物でお越しただけでしょう」

「女性が必要な物が揃っている……。ふーん……」

雪菜は、将一をじつと見た。

「な、なんだ？　俺だけではないぞ」

「だけではない。ってことは、お兄さまも……」

「おまえは、つまらんことを気にせんでいい。それよりも、早く体を直すことに専念しろ」

「はい」

「惣領殿、お邪魔いたします。貴船殿が、小広間までお越しただ

きたいとのことですよ」

若い男の声が、障子越しに聞こえた。

「なんだ。急用か？」

「はい」

「わかった、すぐに行く。それでは雪菜、気を付けて行ってこい」

「ありがとう、お兄さま。良くなったらすぐに戻るね」

「ああ、待っているぞ。藤枝もゆっくりしてきなさい」

「ありがとうございます」

菊花は礼を言つと、廊下に出て将一を見送つた。

「雪菜さま。山荘に行くことを、水越さまに伝えましょうか。使いの者を呼びますね」

用事を済ますと、菊花は雪菜の枕元に戻ってきた。

「呼ばなくていいよ」

「え……？」

「昨夜ずっと考えていて、気が付いたの。直也には気になることが沢山あつて、あたしのことは後回しになることが多いんだなつて。

考えてみれば、あたしが直也を追いかけているだけだもんね。あたし、嫌われないうちに少し距離をおこうかなあ、と思っているの。

だから、直也には何も言わないでいいよ」

「そんなことはありません。水越さまは、雪菜さまのことをちゃんと考えていらつしやると思っています」

「ありがとう。でもね、直也はあたしと向き合うことを避けている気がするの。直也のことを諦めたわけじゃないけど、しょうがないもんね」

「雪菜さま……」

「菊花、支度に取りかかってくれる？　あまり時間がないんですよ？」

「？」

「はい……」

「悪いけどあたし、ちょっと寝るね」

「はい。今はお体を治すことだけを、考えてください」

「そうだね。早く治さなきゃ」

そう言って、雪菜は目をつぶった。

だが目を閉じると、どうしても直也の姿を思い浮かべてしまう。

直也……。

あふれ出ようとする涙を必死にこらえていると、いつのまにか、柔らかい手が額におかれていた。

その手は優しくすべるように、何度も雪菜の頭を撫でる。

子供をあやすように、そっとそっと……。

菊花の優しさが、あたしの中に流れこんでくる……。

雪菜の心が穏やかな喜びでいっぱいになり、身体中が満たされていく。

たかぶりにかけた感情が落ち着き、眠りの淵に導かれていく、雪菜の意識。

ふわふわとしたその淵の底で、なにかが暖かい光を放っていた。

あれ、なに……？　なんだか、とても懐かしい……。

雪菜はその光に向かい、底へ底へと沈んでいく。

身体に触れる淵の水が、雪菜を守りながら光に導いているようで、とても心地いい。

雪菜は底にたどりつくと、光に両手をのばした。

ふにやりとした軟らかいものが、指先に触れる。

これ、なんだろう……。

雪菜は両腕でそれを抱きしめた。

ふにやふにやしていて、とても気持ちがいい……。

「きゃっ！」

雪菜が目をつむって身を委ねていると、突然、それが強い輝きを放ち始めた。

雪菜は慌てて、後ろに下がる。

光のきらめきは少しずつ弱くなり、やがて女の幻影を映し出した。
「え？」

思いがけない幻に、雪菜はそこから動けなくなる。

それは幼い雪菜を膝にのせ、笑いながら髪を結ぶ母の姿だった。

部屋の中には英樹と吉住、それと見覚えのある男が二人いる。

将一と敏郎が部屋に入ると、吉住の後ろに控えていた二人の男が、少し震えた。将一と言葉を交すことなど年に一度あるかないかなので、緊張しているらしい。

「その者たちは確か、牛島洋平と池野文彦と申したな」

惣領に名前を覚えられているとは思ってもみなかったのだろう。

洋平と文彦は平伏した。

「ところで英樹、一体なにごとだ」

「本日未明に、原口の横領の仲間と目していた七戸雅也を、我々が急襲いたしました」

英樹の代わりに、吉住が落ち着いた声で報告をする。

「それで？」

「味方に死者三名の損害を出し、七戸雅也も死亡いたしました」

「なに？ 七戸を殺しては意味がないではないか！ 七戸の親玉を探っていたのであろうが！」

声を荒げる将一に、洋平と文彦は身をすくませた。

「殺した理由を申してみよ」

「七戸の抵抗が激しかったため、捕縛が難しいと判断いたしました」

「俺は五体満足で捕縛しろとは言っていないぞ。それは理解しているだろうな」

大事な証人を殺したというのに、吉住の落ちつき払ったその態度が、将一の癪に障る。

「惣領殿、こちらをご覧ください」

吉住が洋平に合図を送ると、脇に置いてあった風呂敷が差し出された。洋平が広げると、中には木箱が入っている。

「それがどうした」

「どうぞ、中をご確認ください」

箱を開けると、刀身が出てきた。

『大森住人 生野巽』と銘が彫られている。

「この銘は……！」

「ご存知のとおり、これは神原が抱えている刀匠の名前でございます」

長い間宮中の警護を預かっていた神原には、刀を鍛える専属の村があつた。そこには腕のいい刀匠が何名もあり、人材を欲している橘は、常にその村に注目していたのだ。

この生野巽という人物も、橘が目をつけている刀匠の一人である。「刀の持ち主は、神原忍。神原の中枢にはおりませんが、一族の者であることには間違いございません。これがあれば、橘が神原を攻める大きな理由になります」

「これならば、神原が横流しに関わっているという十分な証拠になりますぞ」

敏郎の声もはずんでいた。

「……」

吉住と敏郎の言葉に、将一は考えこむ。

「いかがでございましょう、惣領殿。今こそ憎き神原を討つ機会ではございませんか」

「兵を送るのなら、わたしが将になろう」

それまでの沈黙を破り、英樹が言った。

第二十三話 落滴（5）

「これは、若松湊を刺した剣だ。私が湊の敵をとってやらねばならぬ」

「英樹……」

激しい感情を隠さない将一と違い、英樹はいつもなだめ役に回っている。その英樹がこう言うのだ。できれば、英樹の意志を汲んでやりたい。

だが……。

「神原への報復は、先へ見送る」

「惣領殿！」

洋平と文彦が同時に叫んだ。

「惣領殿らしくないご決断でいらっしゃいます。神原が橘をなめてかかって黙っておられると？」

「渡部、言葉が過ぎるぞ」

敏郎が吉住を睨む。だが、吉住の表情は全く変わらない。

「よい、小早川。皆の不満はもつともだ。だが、よいか。英樹の妹、白華姫は大貴族との縁組がすすみつつある。中級貴族とはいえ古い家柄の神原を討てば、貴族どもの反感を必要以上に買う恐れがある。そこをこり押しできるほど、今の橘に力はない。以上の理由から、神原への報復は先へ見送ることとする」

「しかし……！」

「誤解をするな。神原に何もしないと云っているわけではない。時期をみると云っているのだ。渡部、よくやった。この刀は有効に使わせてもらうぞ。英樹、その時がきたら、思う存分やれ。それまでは耐えてくれ。よいな」

将一のその言葉が、終了を示していた。

「英樹、何か不満があるならば言ってみろ」

無言のままの英樹に、将一が言う。

「惣領の決定に異議を唱えるつもりはない」

英樹は、それだけ言った。

「分かっているならいい」

将一が席を立つ。敏郎も立ち上がり、部屋を出ていった。

「おまえ達も朝早くからご苦労だったな。今日は昼寝くらいなら許可しよう」

「はは。ありがとうございます」

不満そうな顔につくり笑いはりつけながら、洋平と文彦も、自分の持ち場へと引き上げていった。

「貴船殿。このままでよろしいのですか」

誰もいなくなった部屋の中で、吉住の声だけが空気を揺らす。

「またその話か。いい加減にせぬか」

「何度でも申し上げます。今回の決定は、貴船殿をないがしろにしているとは思えません」

「渡部、口を慎め」

「惣領殿は貴族を恐れていらっしゃいます。それはこの国で最も尊い御方の御意思が、御自分にないことをご存知だからでしょう。けれども貴船殿は違います。冷静で事の道理をわきまえていらっしゃる貴船殿に、期待を寄せる者も多いのです」

「渡部……」

「今こそ長年の物思いに決着をつけられる時ではありませんか。このままでは、若松とて浮かばれません。そう思われませんか」

「……」

「それに神原の歌姫　織音という女性の件をこのままになさるおつもりですか」

その名前を耳にし、英樹の表情が変わる。

「どこでその話を知った」

「ごく限られた者しか存じません。ご安心を。ですが、いつ惣領殿の耳に入るか、分かりませんぞ」

「その時は仕方あるまい」

「よろしいのですか。惣領殿が怒りのあまり強硬手段に出られたら、どうなさるおつもりですか」

「将一は嫌がる女に無理強いするような男ではない」

「激情に駆られた男はどうなるか分かりませんぞ。それに、貴船殿を脅しの種に使えば、女も承知するでしょう」

「渡部……！」

「愛しい女が他の男に抱かれてもよいのですか。若松を失っただけでなく、女までも失うかもしれません。貴船殿は、それでも耐えるのですか」

「……………」

「ご決断を、貴船殿」

自分の心が揺らいでいるからか、それとも思考を止める囁きのせいなのか。

吉住の顔が歪んで見える。そして、織音の泣き顔がそれに重なった。

泰史が吉住を訪ねると、使いの男が部屋にいた。

「魚沼さまは大変喜んでいらつしやいまして、渡部さまによろしく伝えてくれと、自分にまで声をかけてくださいました」

「そうか。あの玉は以前からお望みでいらしたからな。ご苦労だった」

男は泰史にも挨拶をして、部屋を出ていった。

「もう贈られたんですか？」

「ああ。今が好機だろう」

「俺もいい報告があります」

「なんだ」

「雪菜さまを山荘にお連れすることになりました」

吉住の動きが、一瞬止まった。

「そうか。よくやった」

「渡部さんが嬉しそうなところなんて、初めて見ましたよ」

「そんなことはどうでもいい。こんなに上手くいくとはな。やはり、おまえを誘ったのは、正解だった」

「ありがとうございます」

「山荘へは、他に誰が行く？」

「青竹さんと藤枝さんです」

「青竹か。大した邪魔にはならんな」

「渡部さん」

「なんだ」

「出勤前、若松に婚約者のことを言ったのは、わざとですね」

「そんなことを聞いて、どうする」

「どうもしません。ただ、知りたいだけです」

「あいつは 無防備すぎて自滅した。それだけのことだ。大事の前だぞ。余計なことに気を取られるな。若松の二の舞になりたいのか」

「いいえ」

「俺はまだ用事があるからここに残るが、片付き次第山荘へ向かう。準備は任せたぞ。いいな」

「はい」

泰史の真横を吉住が通り過ぎる。

泰史の背後で、引き戸を閉める音がした。そして、吉住の足音が遠ざかっていく。

「油断するなよ、か」

泰史は周囲の気配をうかがった。

耳に入ってくるのは、冬の寒さに枝がきしむ音。皮膚に感じるのは、刺すように冷たい冬の息吹だけ。

誰もいないことを確認すると、棚の上から埃のかぶった箱を取り、机に置いた。埃に指の痕をつけないように、蓋の縁をそつと持ち上げて、中を見る。

「ない……!!」

ここにあるはずのものが、見当たらない。

誰が移したんだ。

渡部さんか？

その時、泰史の全身が空気の震えを感じ取った。

「誰だ！」

戸口に駆け寄って外に飛び出す。

気配は残っていたが、人の姿は消えていた。

「まずいな」

刀にかけた手を下ろしながら肩に力を入れ、泰史は呟いた。

第二十三話 落滴（5）（後書き）

あけましておめでとうございます。

みなさまのご多幸を心よりお祈り申し上げます。

さて、突然ですが、しばらくの間「春隣」の更新を停止させていただきます。

色々と思うこともあり、このまま話を続けていてもいいものかどうか悩みまして、一旦この話から離れることにいたしました。

プロットは最後までつくってありますし、愛着もある作品なので、また書きたいとは思っているのですが……。

読者の方にはご迷惑をおかけして、申し訳ありません。なにとぞご了承くださいますよう、お願い申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7902a/>

春隣

2010年10月11日17時28分発行